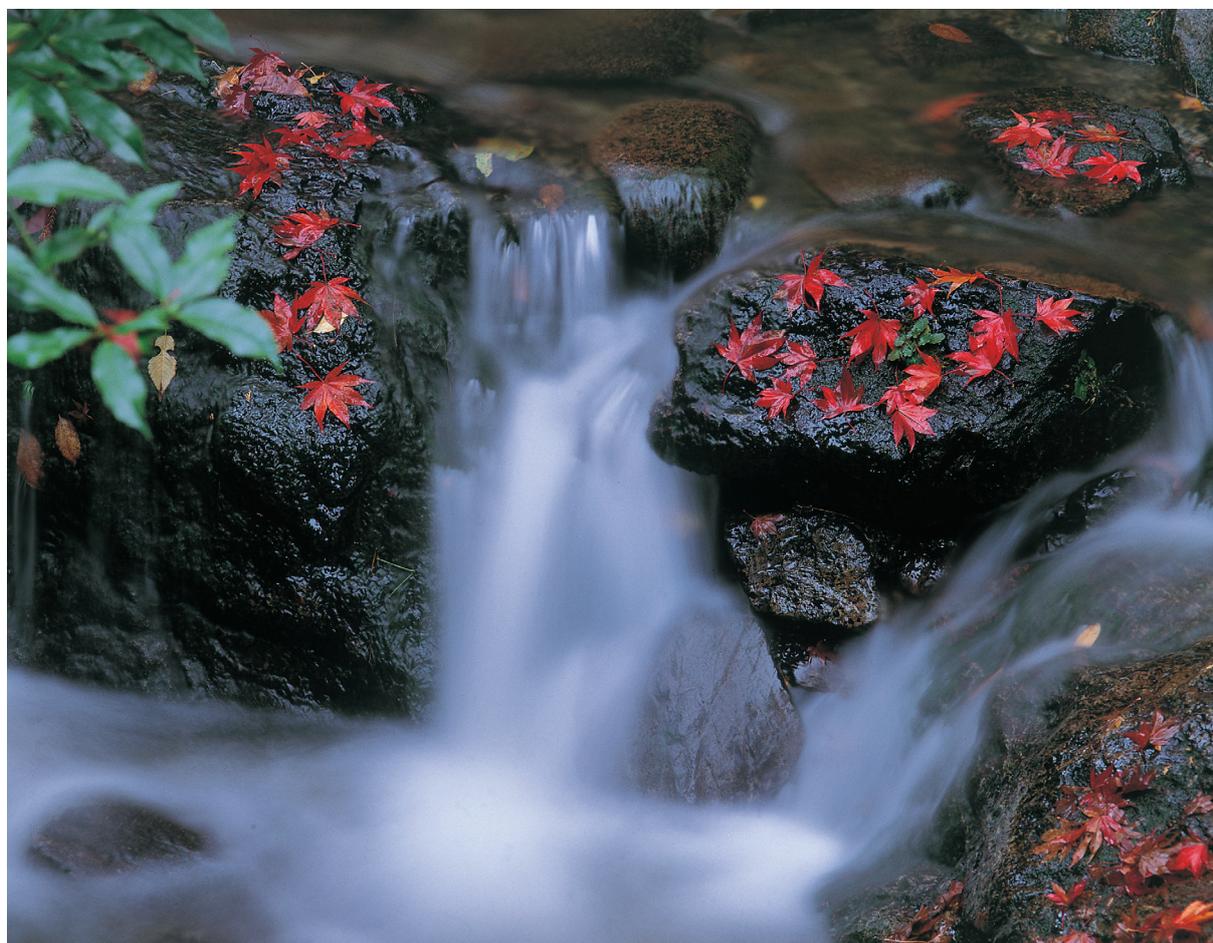


愛知医科大学 学報



岐阜県 横蔵寺
(写真提供 病院病理部 水野義己参事)

＝ 第140号 ＝

2015. 10月

愛知県長久手市岩作雁又1番地1
〒480-1195

学校法人 愛知医科大学

愛知医科大学ホームページアドレス
www.aichi-med-u.ac.jp

■ 主な目次 ■

平成27年度総合防災訓練……………	2
平成28年度予算編成方針……………	3
教授就任インタビュー……………	4
平成28年度大学院入試……………	12
コンケン大学医学部短期留学体験記……………	16
医学部学外体験実習体験記……………	18
看護学部キャンドルセレモニー挙行……………	20
教育・研究最前線「公衆衛生学講座」……………	37

平成27年度総合防災訓練実施

学校法人愛知医科大学消防計画第69条に基づき、平成27年10月15日（木）に教職員、学生を始め、近隣の医療機関及び長久手市消防本部など関係機関を含む約1,000人の参加協力を得て、平成27年度総合防災訓練を実施しました。

訓練は、午後2時に南海トラフ地震でマグニチュード9.0、長久手市で震度6強の地震を観測し、病院機能は一部麻痺しているものの、患者受け入れは可能との想定の下で行われました。

訓練種別としては、全職員を対象とした本部共通訓練と個別訓練参加者を対象とした部門個別訓練とに区分けし、実施されました。本部共通訓練では、各部署から職員参集状況報告書、入院患者状況報告書等を提出するとともに、安否確認システムを活用した安否状況の確認を行いました。また、衛星電話、トランシーバーを使用し、電話連絡等が不通の場合でも情報連絡がとれる体制であることを確認しました。

医学部・看護学部災害対策室では、学生の避難誘導訓練及び災害に係る講演を実施し、愛知県医務国保課から講師をお招きし、愛知県の災害医療体制について講演して頂きました。法人本部災害対策室では、中部電力及び東邦ガスの協力を得て、電源確保対策、ガス供給対策等、現実さながらの訓練を実施しました。

病院災害対策室における図上訓練では、外部講師として堺市立総合医療センター・救命救急センター長である中田康城先生をお招きし、昨年の2倍の時間を割きました。参加者も、医師、看護師、コメディカル、事務職員と異なる職種で構成しバランスのとれたグループ編成としました。こうした取り組みもあり、効果的な訓練をすることができました。しかし、検証会では、発災が夜であった場合、訓練のように対応できないこと、また本学のアクセスルートについて、ルートが止まった場合の対策など課題がいくつか挙げられました。

こうした課題を解決し、いざという時に役立つ訓練としていくため、より一層実効性のある訓練の実施に努めて参ります。



災害対策本部



病院対策本部



防災訓練の様子

平成28年度予算編成方針

平成28年度予算編成については、次の方針に基づき編成するものとする。

新病院を含むキャンパス再整備計画も大詰めを迎えており、旧AB病棟等の解体工事も順調に推移しています。平成28年度は、まずは充実した病院の機能を最大限に発揮し収益アップに繋げ、安定した財政基盤を構築する必要があります。

本学を取り巻く環境は、平成29年4月に予定されている消費税率10%の引き上げに始まり、借入金の返済ピークが平成29年度、少し先のこととはいえ、*2020年度（平成32年度）からの医学部の定員削減構想、2025年度（平成37年度）に向けた厚生労働省の地域医療包括ケアシステム等医療費抑制施策等全く予断を許さない状況が待ち受けています。平成27年度の収支見込は10月以降、もう一つギアを上げれば予算の帰属収支差の確保が見えてくるまで来ており、引き続き支出予算の適正化と効

率化の手を緩めることはできません。

来る平成28年度は、病院の機能を最大限に発揮して、効率的で高収益体質の構築につながる事業を最優先し、複数年にわたり未執行の事業は白紙とし、既存の財政支出は、ゼロベースで事業項目の見直しと効率化を図ることとします。教育・研究環境も大幅に改善されたことから、今後は質の高い医療人の育成を図るとともに、研究推進のための競争的資金の獲得支援、研究活性化を図る方を積極的に展開していくこととします。

平成28年度予算編成は、資金収支予算ベースでは繰越支払資金の具体的な目標金額を50億円とし、事業活動収支予算ベースでは、特殊要素（新規減価償却費分他）を除き、黒字予算の成立を図ることとします。

※日本経済新聞 2015/9/13朝刊

長寿たすけ愛講演会2015in名古屋・ 第26回長寿社会フォーラム開催

平成27年9月4日（金）午後1時からウインクあいち大ホールにおいて、「長寿たすけ愛講演会2015in名古屋・第26回長寿社会フォーラム」が開催されました。

長寿社会フォーラムは、例年、本学と日本福祉大学で開催しており、今年度は、公益財団法人長寿科学振興財団からの助成を受け、同財団と2大学の共催で開催することとなりました。

フォーラムでは、主催あいさつとして、公益財団法人長寿科学振興財団の祖父江逸郎理事長（元愛知医科大学長）、本学の佐藤啓二学長、日本福祉大学の二木立学長からあいさつがあった後、二つの講演会とトークショーが行われました。

第一講演では、「超長寿時代を生きる」と題し、公益財団法人長寿科学振興財団の祖父江理事長が講演され、第二講演では、「自分で取り組む認知症予防の方法」と題し、国立研究開発法人国立長寿医療研究センター老年学・社会科学センター予防老年学研究部の島田裕之部長による講演が行われました。二つの講演では、目前に迫る超高齢化社会に向けて、豊かで生きがいのある人生を歩む為に、自ら実践できる取り組みの紹介等があり、



講演する祖父江理事長
と島田部長



参加者は熱心に聞き入っていました。

また、講演会終了後には、「春風亭小朝の人生笑談」と題し、春風亭小朝師匠によるトークショーが行われ、小朝師匠が繰り広げられる巧みな「人生笑談」に会場は笑いの渦につつまれ、和やかにフォーラムが終了致しました。

平成27年度愛知医科大学公開講座終了

平成27年9月12日（土）・19日（土）・26日（土）の計3回にわたり開催された、平成27年度愛知医科大学公開講座が終了しました。

今年の公開講座は、身近な病気やその対処法について学んで頂くために「体のトラブル対処法」というテーマで開催し、開催期間中は、近隣住民の方を始め、3日間で延べ495名の方々に参加して頂きました。

また、3日間全てに出席頂いた92名の方々には、最終日となる26日の講座終了後の閉講式において、佐藤啓二学長から修了証書が手渡されました。

来年度も皆さまの生活に役立つ公開講座を企画・運営してまいりますので、多くのご参加をお待ちしております。

教授就任インタビュー

平成27年度に新たに教授に就任された先生方をご紹介します。



医学部外科学講座(心臓外科)・教授

まつやま かつひこ
松山 克彦

— 教授就任に当たっての 抱負を聞かせてください。—

今後、戦後最大の高度高齢化社会を迎える中、心臓、大血管疾患が増えることが予想されます。心臓外科では、虚血性心疾患、弁膜症、大動脈疾患と成人心臓血管外科領域を幅広く診療しています。また、急性心筋梗塞や不安定狭心症などの急性冠症候群や、急性大動脈解離や大動脈瘤破裂などの急性大動脈症候群に対しても、昼夜を問わず24時間体制で対応しています。患者さんの状態に応じ、ご家族と十分なインフォームド・コンセントの下、患者さんにとっての最善の治療を行うようにしています。本院はハイブリッド手術室を有しており、心臓手術の低侵襲化を目指します。具体的には、小切開及び内視鏡を使用した手術、将来的には経カテーテル大動脈弁置換術も行っていきたいと考えております。前赴任地は、新宿駅と東京都庁が目と鼻の先にある、まさに東京都心に位置した東京医大病院で勤務させて頂きました。ここで培いました経験を活かし、大学病院として最先端の医療を志し、また、地域医療に力を注ぎ、微力ながら貢献したいと思う所存です。

— 現在の研究分野に進まれた きっかけを教えてください。—

前職の東京医科大学において、小切開手術の日本の第一人者である杭ノ瀬教授のもと、小切開手術あるいは低侵襲手術を学びました。この手術は高度な技術が必要で、かつ外科医にとって想像を絶するストレスを感じることがありますが、従来の手術と比較し、痛みが少なく、術後の回復が早く、早期の社会復帰が期待できます。これからは、患者さんのニーズに応え、患者さんにやさしい治療及び手術が要求される時代になったと感じております。

— 学生へのメッセージをお願いします。—

外科といえば、時間外労働が多い、ストレスが多い、訴訟が多い、一人前になるのに時間がかかるなどの理由で敬遠されがちで、近年外科系志望者が激減しております。確かに外科系は「きつい」かもしれませんが、患者さんを自分の手で治し、元気にすることができる非常にやりがいのある職種です。楽をしようとするればいつでもできますが、若い時ぐらいいは、ハングリー精神、ガッツをもって一生懸命に患者さんのために働いてみてはどうでしょうか。日本の外科の未来を今の若い人たちに期待します。

オフショット





医学部外科学講座 (腎移植外科)・教授

こばやし たかあき
小林 孝彰

— 教授就任に当たっての 抱負を聞かせてください。—

(1) 移植医療の普及

2010年に改正臓器移植法が施行されましたが、日本では海外と比べて脳死（死体）移植数がとても少ないことが大きな問題となっています。患者さんのコミュニティを通じた啓蒙活動、一般市民に対する公開セミナー、そして良好な成績を伴った移植数の増加が移植医療を定着させるために大切だと思っています。Gift of life（命の贈り物）を通して、1人でも多くの患者さんが、移植医療で救われることを願っております。

(2) 安全、安心、最先端医療の提供

日本では、生体腎移植が中心となっておりますが、腎提供者（ドナー）の存在が他の医療と異なるところです。腎移植を受けるレシピエントを思う献身的な行動があるから成り立つ医療です。ドナーとレシピエント、そして家族全体が、移植医療を通して更に強い絆で結ばれることも多く、愛、希望、勇気、夢、喜び、元気、感謝といった感動を、私たち医療チームにも与えてくれます。

私たちは、腎臓を悪くされた患者さんにご家族にとって最善の治療を選択していただけるようにサポートします。そして、移植を受けられる場合には、それぞれの患者さんに最適の移植医療（手術、免疫抑制療法）を提供します。10年、20年、30年と移植した腎臓が機能し続けるように、患者さんと共に歩んでいきたいと思っております。

(3) 総合的な移植チームづくり

現在の課題は、長期成績の更なる改善、慢性拒絶反応の克服、個別化医療の導入、そしてドナー不足問題の解決です。本学では、レシピエントコーディネーターが設置されており、コメディカルを含めた移植医療チームが充実しております。更に、研究部門を併設することで、科学・技術の進歩を医学に導

入し、最新の研究成果に基づく医療を展開していきます。個人の力ではなく、チームの力を発揮できるような組織作りが重要と考えております。

— 現在の研究分野に進まれた きっかけを教えてください。—

当初は、基礎講座に進むことを考えておりました。私に多くの社会勉強をさせていただいた生理学の教授に、1年だけ臨床を行いたいと希望して、市民病院で研修致しました。そこで、患者さんに接し治療を行う臨床現場の楽しさを覚えてしまったのです。中でも、外科はすぐに治療効果が見られ、内科的治療で困難な症例の治療も行えるということで魅力を感じました。その結果、基礎の教授を大いのがっかりさせてしまいました（今でも連絡を取り合っています）。

一般外科・消化器外科では、当時がんの手術は拡大手術が主流であり、摘出後の機能はあまり考えてはいませんでした。機能の悪くなった臓器を健康な臓器と取りかえる移植医療があることを知りとても興味を持ちました。

— 学生へのメッセージをお願いします。—

人生で大切なことの80%は、35歳までに起きると言われております。今が大切です。今しかできないことを考えて実行してください。そして、多くの経験をし、多くの人に出会い、生き方（生き様）を学んでください。思いがけない偶然から、予想外のものを見出し役立てる能力（セレンディピティ）も重要です。一期一会の気持ちを持ち続けてください。社会に出てからは、組織の中で生きていかなければなりません。組織をより良くするため、何ができるか考えましょう。そして、自分の活躍の場を探し出してください。大切なことは、与えられた仕事でも常に全力をつくすことです。次の展開に繋がります。自分の目標を明確にして、高い志を持ち続けてください。必ず、達成できます。

オフショット



小樽北運河にて



医学部整形外科学講座・教授

でいえ まさたか
出家 正隆

— 教授就任に当たっての
抱負を聞かせてください。—

整形外科の中でも膝関節の病気を専門とし、主にスポーツで受傷する膝前十字靭帯損傷、半月板損傷、加齢による膝関節の障害に関する研究・診療を続けて参りました。

整形外科診療は、人体の関節・骨・筋・神経など幅広い分野を担当する診療科であり、私自身は約20年間膝関節を中心に診療・手術を行ってきましたが、サブグループとして膝関節以外に、肩関節、股関節、脊椎などの分野に分かれています。そのためには、整形外科の中で各グループ間の良好な連携のもとに、診療レベルの向上を計りたいと考えます。

また、大学病院は、地域の病院や医院から多くの紹介患者を受けるその地域の中心的な病院であり、地域の「最後の砦」であると考えております。手術あるいは治療困難な重篤な疾患や症例などに、逃げず立ち向かう積極的な姿勢で望むべきで、十分なインフォームド・コンセントも必要かつ不可欠ですが、「患者さんを自分の家族だったらどうするか」を基本理念として医療を行うことが患者さんのためになり、地域医療連携の推進及び地域医療への貢献に繋がるものと信じており、そのような医療が実践できるよう努めて参ります。

— 現在の研究分野に進まれた
きっかけを教えてください。—

学生時代より、スポーツをやっていたので、内科より外科のほうに親しみがあったということが、大きな流れです。心臓外科とか脳神経外科という感じがかっこよいイメージを持っていましたので、どちらかに進むことを真剣に考えていました。そのころ、学生の臨床実習で整形外科をさぼって、整形外科の医局カンファレンスに呼び出されて、そこで軟式テニス部の先輩（整形外科の恩師越智広島大学長ですが）にお会いして、誘って頂き、整形外科の道に進むことになりました。整形の実習をさぼらなければ、越智先生に誘ってもらってなかったら、整形外科医になってなかったでしょう。

— 学生へのメッセージをお願いします。—

医学部生なので、医学の勉強は当たり前です。しっかり学問に励んでください。それと同時に、ぜひクラブ(できれば運動系, 医師には体力も必要です。)に所属して最後まで継続してほしい。今の医学部生は、学業優秀で親からもあまり怒られることもない人が多いように思いますので、クラブでは、先輩から怒られたりして、辛いこともあると思いますが、社会に出ればそんなことは当たり前で、最後までやり遂げて卒業してほしいです。また、医師として働くためには、まず患者さんと話ができること、多くの医療関係者とも協調できないといけません。相手を慮ることができるように、学生時代に人間性・社会性を高めてください。欲を言えば、英語を勉強して、海外へも遊びでいいから行ってきてほしいですね。

オフショット



坂本竜馬像を見下ろして（高知県桂浜にて）



医学部眼科学講座・教授

かめい もとひろ
瓶井 資弘

— 教授就任に当たっての 抱負を聞かせてください。—

私は、生まれも育ちも大阪市内で、昭和63年に大阪大学を卒業し、眼科に入局しました。当時の教授の口癖が「なんでや？」でした。これにより、常に原因・メカニズムを考えることを叩き込まれました。「治らない病気を治す」ことに情熱を傾けている先輩達に囲まれて育ち、網膜硝子体疾患の専門家になることを志しました。

網膜硝子体とは目の奥の部分であり、一般に眼底と呼ばれる部位です。眼底出血や網膜剥離、加齢黄斑変性などがよく知られた病気だと思います。眼底出血は糖尿病や高血圧・動脈硬化と言った生活習慣病（かつては成人病と呼ばれていた）に合併するので、患者さんの数はとても多く、高齢化に伴い今後とも増え続けることが予想されます。

網膜硝子体疾患の治療の中でも、特に手術治療を得意としており、網膜剥離、糖尿病網膜症、黄斑疾患（黄斑円孔・黄斑前膜・黄斑浮腫など）に対する手術をこれまで3,000件以上執刀してきました。基本的な手術である白内障手術はその倍以上の執刀経験があります。

また、眼内注射やレーザーを駆使して治療する網膜静脈閉塞症の治療では日本を代表する眼科医として、国内のみならず海外での講演も行っています。

五感（視覚・聴覚・嗅覚・味覚・触覚）のうち、眼から入る情報が8割とも言われています。字が読めなくなる、視野が狭くなる、眼が見えなくなると言うのはとても辛いことです。患者さんが少しでも視力を取り戻せるよう、あらゆる技術、最先端の器械、最新の治療法を使って治療に当たりたいと思います。しかし、既に進行した状態であったり、現代医療ではまだ治せない病気もあります。そんな患者さんの一人がおっしゃった言葉に「見えないことは

不自由であるけど、不幸ではない。」と言うものがあります。ロービジョンケアにも力を入れていきたいと考えておりますので、持てる視力で前向きに生きていくことをサポートしていきたいと思っております。一人ひとりの患者さんの幸せを願って、ベストの治療を提供していきます。

「愛知医大の眼科にかかって良かった。」と言ってもらえるよう、スタッフと一丸になって頑張ります。

— 現在の研究分野に進まれた きっかけを教えてください。—

学生の頃にテレビ広告で「初めて見えたのは、先生の大きな手でした。」という角膜提供を呼びかけるものがあり、心を動かされ、これをやろう！と眼科医になりました。実際に眼が見えなかった患者さんが見えるようになると、非常に喜ばれ、眼科医の道を選んで本当に良かったと思っています。

また、一般の外科の手術はたくさんの先生が共同で行いますが、眼科の場合は、助手の先生が付くものの基本は自分一人で行います。つまり、手術の成果は、一人の腕にかかっているわけです。手術で名をあげたい、手術が好きだという人に向いているのが眼科と言えると思います。

— 学生へのメッセージをお願いします。—

目の脳卒中と言われる網膜静脈閉塞症の治療や人工網膜の開発など、多くの臨床研究を促進し、本学が日本の眼科医療のリーダーになることを目指して参ります。

学生の皆さんには、患者さんの社会生活を第一に考えた質の高い医療を提供できる医師に育ってほしい。医師の仕事に終着点はありません。これからも、皆さんと一緒に勉強を続け、次世代の眼科医の育成と医療の更なる発展を図っていきたくと思っています。

オフショット





救命救急科・教授

たけやま なおし
武山 直志

— 教授就任に当たっての 抱負を聞かせてください。—

本院高度救命救急センターは、愛知県で唯一高度救命救急センターの指定を受けるとともにドクターヘリをいち早く運用し、地域医療ネットワークの中心として、24時間365日シームレスな患者受け入れ体制を構築しております。救急要請を受けた全患者の救命を目標に、救命救急科スタッフは、ドクターヘリ、ドクターカーを擁する病院前医療、迅速・的確な初期診療を行う救急初療室（ER）、集約的な医療を提供する重症患者管理部門（EICU）、中等症患者管理部門（HCU）を駆使して治療に当たっております。

私自身救急医療に携わって35年余りになります。その当時も今と変わらず、救命救急センター初療室には、重度外傷、急性腹症、意識障害、心肺停止患者など様々な重症患者がひっきりなしに搬送され、まさに“息をのむ”光景でした。“これらの患者に適切な医療を行うことができる医師を目指したい”。私が抱いた素朴で率直な感覚を若い先生と共有して診療を行いたいと考えております。

現在は、感染症、外傷、手術を始め生体に及ぶ多彩な侵襲は、一様に全身性炎症反応症候群として捉えられています。その結果、ARDS、AKI、DICを始めとした臓器不全に対する管理、治療法は著しい進歩をとげ確実に救命率は向上しております。今後更に救命率を向上させるために、侵襲反応のdetrimentalな面を軽減させphysiologicalな面を促進させる“侵襲反応制御”を臨床応用するなど最先端医療を進めていきたいと考えております。

浅学非才ではありますが救急医学の更なる飛躍、優れた救急医の輩出、全患者救命を目指して努めて参る所存です。

— 現在の研究分野に進まれた きっかけを教えてください。—

母校である関西医科大学に救命救急センター（後に高度救命救急センター）が設立され、大学病院で重症救急患者の治療を本格的に行うことができるようになったのが昭和54年でした。専門科に特化しない様々な急性期疾患の診断、管理、治療を経験することが必要と考え卒業後1年目から母校の救命救急センターでお世話になりました。救急搬送される患者は予想以上に多彩、重篤で1年目の私には全く歯が立ちませんでした。幸い多くの先輩方に恵まれ臨床指導のみでなく、学会活動、論文執筆を始めとしたアカデミズムを追求する姿勢に至るまで多くの事を教えて頂きました。厳しさと暖かさを兼ね備えた諸先輩に感謝しております。

— 学生へのメッセージをお願いします。—

救急医学とは、救急で来院する全ての救急疾患の診療、教育、研究を行う学問です。中でも救命救急センターを擁する本院では、生命に直結する重症救急患者を対象にした救命治療医学を中心に行っています。すなわち生命の危機にさらされた患者に対する蘇生学、重症患者に共通して認める侵襲生体反応を追求し病態・治療法を研究する侵襲学、更には外傷学、総合診療学、中毒学、重症感染症学を含みます。ドクターヘリを始めとした病院前救急医療にも注力しております。ダイナミックな救急医学をぜひ皆さんと一緒に勉強していきましょう。

オフショット





看護学部感染看護学・教授

さとう
佐藤 ゆか

— 教授就任に当たっての
抱負を聞かせてください。—

我が国の医療をめぐる環境は、医療の高度化や多様化、急速な高齢化に伴い、大きく変化しております。そのような変化に対応すべく、看護教育にはより高度な教育が求められております。私は、医療情勢と本学の強みを見極め、学部や大学院教育の充実に力を尽くしていきたいと考えております。

本学の大学院教育では、全国でも先駆的に感染症看護専門看護師の育成に取り組んできました。専門看護師は、複雑で解決困難な看護問題を持つ個人、家族及び集団に対して水準の高い看護ケアを提供する、専門分野の知識・技術を深めた看護師のことをいいます。本学では、感染症看護専門看護師教育課程のより一層の充実を図るため、新たな教育課程の整備を進めております。私は、新たな教育課程の充実を図り、看護学部・医学部の諸先生方、事務部や関係施設の方々のお力添えを頂きながら、優れた専門看護師の育成に尽力していきたいと考えております。

最後に、私は、宮城県で東日本大震災を経験しました。全国の多くの方々からあたたかく、かつ、多大なご支援頂きましたこと、厚く御礼申し上げます。私の経験は未曾有の大震災のごく一部ではありますが、愛知の地でお役に立てることがあれば幸いです。

— 現在の研究分野に進まれた
きっかけを教えてください。—

感染の分野に無縁だった私が、感染看護学の研究分野に進んだきっかけは、1990年代初めに経験したMRSA（メチシリン耐性黄色ブドウ球菌）による院

内感染でした。当時、根拠のある有効な感染対策が確立していない中、手探りで感染拡大を防止する対策がとられました。しかしながら、それらの多くは非科学的であり、効果の乏しいものでした。そのため、院内感染は繰り返し起き、ICU（集中治療室）に勤務していた私は、MRSA感染を引き金に複合的な要素で身体状況が悪化する患者さんを目の当たりにしたのです。そこで、専門的な教育を受けるために大学院へ進学することを決意し、それ以来、感染管理をふくむ感染看護学の教育・研究に携わっています。

— 学生へのメッセージをお願いします。—

【看護学部】

将来、看護専門職として活躍していくために、多くの知識や技術を主体的に学んでいきましょう。更に、看護専門職者として不可欠な高い倫理観と看護観を培ってください。

【看護学研究科】

感染看護学分野には、修士論文コースと感染症看護専門看護師コースがあります。専門的な教育や看護研究をとおして、論理的思考や表現、物事を探求する姿勢、多角的な視点や考え方、課題解決能力を獲得してください。

【認定看護師教育課程】

看護学部には、感染管理と救急看護の認定看護師教育課程があります。修了後には、所属する施設や地域において、中核となって活動できるように臨床に根差した専門的な知識とスキルを獲得してください。

オフショット



京都府立植物園にて



看護学部クリティカルケア看護学・教授

まつづき
松月みどり

— 教授就任に当たっての
抱負を聞かせてください。—

私は、臨床看護の実践及び看護管理者として経験を積んできました。臨床看護では、NICU看護、手術室看護、消化器外科移植外科看護、救急看護とクリティカルケア領域を専門に実践してきました。ここでは、看護の方法や看護診断に迷うことは多く、課題や疑問を解決するために関連領域の書物や文献を読み漁りました。そこで得たものは、看護学とは、周辺領域の学問を応用して看護ケアの方法を創出する「看護は実践の科学」であるということでした。また、関連領域で一番よく学んだのが基礎医学でした。医学というよりは、人間の身体の正常と病気の状況を理解するための学問といった方が良いかもしれません。その中でも、私が興味を持ったのが分子生物学でした。細胞レベルの薬物動態や、巨大侵襲時のサイトカインは、高度救命救急センターの集中ケアの時期にはよく学びました。そして、医師たちと患者さんの治療方針とその効果について、看護チャートを見ながらよく議論していました。

その後、看護管理者の立場で、公益社団法人日本看護協会の常任理事として昨年法制化した「看護師の特定行為研修制度」に関わりました。これは5年以上かかって成立した法律であり、看護師の役割拡大は長年の夢でした。そして、その制度の現場実践者の育成に関わるために、本学看護学部に参加しました。優れた臨床判断と特定行為を含めた臨床看護実践ができる看護師を育て、次世代の医療体制の重要な担い手を育成したいと思っています。

本年7月1日から就任いたしました。宜しくお願いいたします。

— 現在の研究分野に進まれた
きっかけを教えてください。—

クリティカルケア看護学に進むことは、看護学校を卒業する時から決めていましたし、以外の領域のことは考慮する範囲にありませんでした。手術室看護も希望して、配属させて頂きました。外科看護を実践していると、その前の手術を経験したくなるのは当然のことだと思います。

更に良質な看護を患者さんに提供したいと考えるようになりました。私だけが良質と思う看護を提供していても、看護は24時間交代制勤務であり、医療チームの質が良くないと患者さんには効果が出ません。そのためには、教育や勤務シフト、質の良い医療者の確保などがあり、良い看護管理者になり裁量権をもたないとダメであると痛感しました。そして、優れた看護師の裁量権を増やせば、日本の国民にもっと良い医療の提供ができると考え、制度改正にも関わって参りました。その根底にあるのは、クリティカルケア看護の質を向上させるためなのです。

— 学生へのメッセージをお願いします。—

いま日本の医療は大きな転換点に立っています。日本の看護は80年の歴史がありますが、これからの医療の質を決めるのは、医療職の大半を占める看護職の能力で決まります。大学の看護学部で学ぶ皆さんは、未来の医療の希望の星です。あなたらしく個性を大切に型にはまらない自由な発想で、新しい看護領域で活躍してくれることを期待して、その基礎になる看護能力を身に付けて頂きたいと思っています。

また、臨床経験を積んだ看護職の方々は、ぜひ大学院に入学して、経験知を暗黙知から形式知に変換し、能力のスパイラルを螺旋階段を登るように実践することと学習することを上手に組み合わせて、生涯を通じて進化して続けて欲しいと思っています。



スペインアルハンブラ宮殿にて（松月教授：左から2番目）

わくわく体験リニモツアーズ2015 「“コードブルー”の世界 救急医療について学び、 考えてみよう！」開催

東部丘陵線（リニモ）の沿線施設の魅力を満喫し、学び楽しむイベント「わくわく体験リニモツアーズ2015」（東部丘陵線推進協議会主催）が、中学生以下の児童を対象に開催されました。

本学においても、平成27年8月10日（月）、8月11日（火）、17日（月）の3日間で「“コードブルー”の世界 救急医療について学び、考えてみよう！」と題した体験講座を開催し、多くの児童及びご父兄にご参加頂きました。

体験講座では、ドクターヘリの見学会、ドクターヘリに関する講演会、質疑応答が行われましたが、幸いにも全日程でドクターヘリの見学会が実施することができ、参加者は機体の迫力を間近で感じていました。

講演会では、本院救命救急科の医師及び看護師による講演会がクイズ形式で行われ、ドクターヘリ、フライトドクターやフライトナースの仕事についての説明がありました。参加者は皆、普段聞けない医療現場の話や、ドクターヘリの話に熱心に耳を傾けていました。

最後には、参加者全員にドクターヘリの特製ピンバッジが配布され、体験講座は盛況のうちに終了しました。



ドクターヘリ見学会



講演会

平成28年度科学研究費助成事業応募方法等説明会 開催

平成27年9月15日（火）・17日（木）の2日間、大学本館204講義室において、科学研究費助成事業応募予定者を対象とした平成28年度科学研究費助成事業応募方法等説明会が開催され、50名の参加がありました。

この学内説明会は、科研費の応募に当たり必要となる申請方法や提出期限などの情報提供により、本学における科研費の申請・採択件数の増加を目的として開催されたものです。

両日とも、総務部研究支援課の佐合範彦主事から説明があり、終了後には出席した研究者から応募等に関する多くの質問・相談が寄せられるなど、大変意義ある説明会となりました。

本学では、今後も研究活動の一層の活性化と科研費を始めとする競争的資金の獲得を推進していきます。



平成28年度大学院医学研究科入学試験 第63回論文博士外国語試験実施

平成27年10月2日（金）大学本館303講義室において、大学院医学研究科入学試験及び第63回論文博士外国語試験が行われました。受験者数は、大学院医学研究科入学試験が14名、論文博士外国語試験が2名となりました。

このため、本研究科では、まだ入学定員に満たないことから、第2次募集を予定しています。

また、本研究科では、これまで社会人入学制度や学納

金減免制度の拡充などを行い、大学院教育を受けやすい環境を整えてきましたので、研究意欲の高い方が多数応募されることを期待しています。

なお、大学院医学研究科入学試験（第2次募集）及び第64回論文博士外国語試験は、平成28年2月5日（金）に実施予定です。

平成28年度大学院看護学研究科入学試験

平成27年9月3日（木）に大学院看護学研究科入学試験が実施されました。

当日は10名が試験に臨み、受験生たちは緊張した雰囲気の中、真剣なまなざしで試験問題に取り組んでいました。

本研究科では、これまで医療等の現場で活躍されている方々が、退職したり休職したりすることなく学べるよう、平日の夜間や土曜日などにも講義、研究指導等を行っております。更に、勤務や育児などの事情により標準修業年限での履修が困難な方を対象とした「長期履修制度」を導入し、社会人がより学びやすい教育環境を整え

ております。

なお、大学院看護学研究科入学試験（第2次募集）は、平成28年2月3日（水）に実施予定です。

【看護学研究科入試結果】

- | | |
|------|-----|
| ○志願者 | 10名 |
| ○受験者 | 10名 |
| ○合格者 | 8名 |

平成27年度看護実践研究センター 認定看護師教育課程入学式挙行

平成27年9月7日（月）午前10時から医心館1階多目的ホールにおいて、看護実践研究センター認定看護師教育課程の平成27年度入学式が挙行されました。

式は、開式の辞に続き、感染管理分野21名及び救急看護分野13名の新入学生が紹介された後、新入学生を代表して、救急看護分野入学生の江坂由美さんから「課程設置規程並びに諸規則等を守るとともに、認定看護師を目指す学生としての本分を尽くすことを誓います。」と宣誓が行われました。

次いで、白井千津センター長から「教職員が皆さんをサポートしていきますので、本学の教育環境を十分活用し、大いに勉学に励んでください。」と告辞があり、続いて、佐藤啓二学長から「より質の高い医療を提供していくために、優れた認定看護師になることを目指し、し

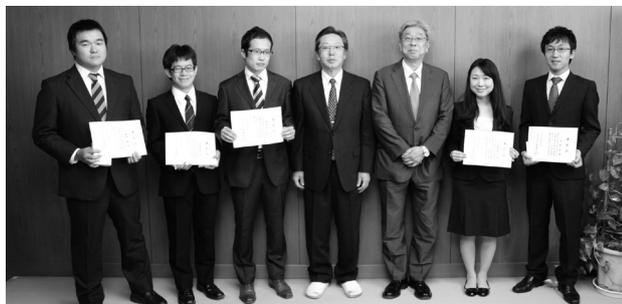


っかりと学んでください。」との式辞がありました。

最後に課程の教員紹介があり、午前10時40分ごろ式は終了しました。

医学部成績優秀者表彰

本学医学部では、前年度の成績が各学年上位の者で、出席状況及び勉学態度等が他の模範となる学生に対して適用された成績優秀者に対し、本人の学習意欲の高揚を更に図るため、顕彰制度を設け表彰しています。



6学年次表彰者

平成27年度は2学年次生から6学年次生の各学年5名の合計25名に対して、佐藤啓二学長から表彰状及び記念品が授与され、一人ひとりに称揚と更なる期待の言葉をかけられました。



2～5学年次表彰者

平成27年度医学部解剖慰霊祭挙行

秋晴れの好天に恵まれた平成27年10月16日（金）覚王山日泰寺において、平成27年度の医学部解剖慰霊祭が、350名余りのご遺族をお迎えし、本学から医学部長及び解剖学講座を始めとする関係教職員約30名、それに医学部の2学年次生127名、看護学部を代表して1学年次生4名が参列して、厳かに執り行われました。

今年度の慰霊祭では、平成26年10月からの1年間に系統解剖と病理解剖にご遺体を供せられた71柱の御霊を新たに合祀し、総数4,862柱の御霊に対し法要が営まれました。

午後2時、導師の入堂により祭儀が始まり、岡田尚志郎医学部長と北村直哉不老会理事長の慰霊の辞、続いて、学生代表として医学部3学年次生の飯田悠介さんが「ご遺体を通じて、私たちの指先に、そして脳裏に刻まれる『本物』の知識は、書物や座学による言葉だけの知識とは異なり、無限と呼べる広がりを用意していました。私たちの身体は、その神秘的な構造によって成り立っているのだという現実を認識させられるとともに、生命に対する畏敬の念を抱かせてくださりました。故人のご意志のもと、ご献体にご理解を賜りましたご遺族の方々、不老会の皆さま方に対し、深く感謝申し上げますとともに、改めて、ご献体くださった御霊のご冥福をお祈り申し上げ、お礼の言葉とさせていただきます。」と礼辞を述べ、御霊に深い感謝と尊崇の念を捧げました。

この後、広い本堂に僧侶の読経が響きわたる中、岡田医学部長、解剖学講座を代表して中野隆教授、病理学講座を代表して池田洋教授がそれぞれ焼香し、続いて学生代表として医学部3学年次生の長嶋愛さんが、その後、



黙とうを捧げる学生たち

参列者一人ひとりが焼香して献体者のご冥福を祈りました。

午後3時、岡田医学部長の参列者に対する謝辞をもってつつがなく慰霊祭が終了し、参列者は、学生が見送る中を帰路につきました。

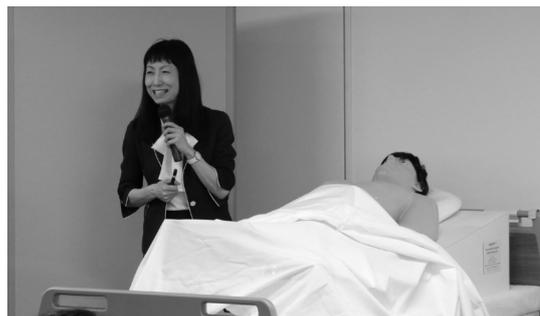
シミュレーションセンター記念講演会開催

平成27年8月3日（月）C棟6階シミュレーションセンターにおいて、阿部幸恵客員教授をお迎えして、「求められるActive Learning-シミュレーションセンターにできること」をテーマに記念講演会が開催されました。

2023年問題を前に、本学も医学教育の国際標準化に向けてカリキュラム改正を行っていますが、卒業時の達成目標を明確にし、より実践力の高い医師を育成する必要があることを強く考えさせられる内容でした。特に、医療系学部においても21世紀スキルやProfessionalismなど、今まで以上に人間力を高める教育が求められています。また、チーム医療に必要な多職種連携教育（Inter Professional Education）を積極的に展開する必要があることが示唆されました。

シミュレーションは、Active Learningの手法の一つではありますが、参加した多分野の教職員に、実現可能なシミュレーションを具体的に検討して頂くきっかけになる講演会でした。

今後、シミュレーションセンターでは、更なる実践的な教育を促進し、安全な医療の提供に貢献できるよう取り組んで参ります。



講演する阿部客員教授



真剣な表情で参加する教職員

秋の交通安全講習会開催

平成27年10月19日（月）午後5時30分から大学本館302講義室において、医学部・看護学部の学生を対象に、名東警察署交通課長の橋本博史警部を講師に迎え、交通安全講習会を実施し、90名余りの学生の参加がありました。

講師からは、愛知県は12年連続して交通死亡事故ワースト1であり、今年も現在のところワースト1であることやお年寄りの死亡事故が多いことなどの講和がありました。

また、本年6月1日から改正道路交通法により、自転

車の罰則が強化されたこともあり、「交通ルールを守らないとこんなに危険です。～自転車を安全に利用するために～」と題したDVDを鑑賞しました。このDVDは、自転車を中心とした内容でしたが、ドライブレコーダーの事故映像など、自動車を運転する時も十分参考になる内容でした。

年2回、春と秋に実施している交通安全講習会を通じ、学生一人ひとりが交通安全に努めてくれることを期待します。

平成27年度医大祭“軌跡”

平成27年度の医大祭のテーマは「軌跡」です。医大祭の開催も今回で42回を数え、医大祭実行委員はこの医大祭を、過去を見直し良き伝統を受け継ぐとともに、未来へと繋げる良い機会にしようとしています。

平成27年10月31日（土）と11月1日（日）に行われる主なイベントは次のとおりです。

【主なイベント紹介】

☆2日間開催イベント

- ・模擬病院
- ・模擬店
- ・看護イベント
- ・病院イベント
- ・学生イベント

10月31日（土）のイベント

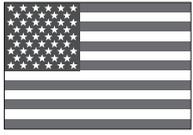
- ・杉村太蔵氏講演会「バカは生きる」

11月1日（日）のイベント

- ・リサイクルマーケット
- ・スタンプラリー
- ・ジャンピングバルーン
- ・献血・骨髄バンク登録



国際交流



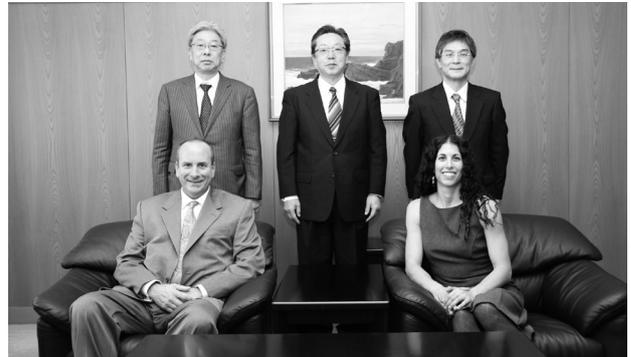
アメリカ南イリノイ大学医学部教員来学 (Southern Illinois University School of Medicine, SIU) ～更なる国際交流の発展を目指して～

本学医学部では、平成17年3月からSIU（南イリノイ大学）との学術国際交流を行っており、SIU教員の招聘や相互に学生の派遣・受入れを行っています。

例年本学からは、5学年次生を対象とした臨床実習に参加するコースと、3・4学年次生を対象としたSIU 2年生カリキュラムを受講するコースの二つのコースへ学生を派遣していますが、この学生の受入れに多大なご協力を頂いているSIUのAnna Cianciolo先生（国際ジャーナル「Teaching and Learning in Medicine」編集長、医学教育講座・講師）が平成27年10月20日（火）、21日（水）に来学され、本学の視察や学生・教員との交流を行いました。

今回の来学では、三宅養三理事長を始め、佐藤啓二学長、岡田尚志郎医学部長への表敬訪問や、内視鏡手術支援ロボット手術における教育訓練やSIUにおける臨床実習体制の改革に関する講演が行われました。

SIUでは先駆的な教育カリキュラムの開発と充実した医学教育システムの整備を重点的に行っており、この講演では、これらに関する知識や理解を深めるよい機会となりました。また、SIUへ派遣予定である医学部5学年次生に対するケースプレゼンテーションの指導だけでなく、同3・4学年次生に対しても、SIUで行われているPBL（問題立脚型学習）や医療英語の指導をして頂きました。



指導後には派遣学生との懇談会も行われ、学生にとっては、指導を受けた際の緊張感から解放され積極的に先生方とコミュニケーションを図り親睦を深めることができ、また、派遣に向けての新たな学習課題を形成できるよい機会となり、モチベーション向上へと繋がったようです。

このように、例年のSIU教員の来学は、両大学の相互交流の更なる発展に大いに役立っています。

医学部では、今後も引き続き学術国際交流協定校等の開拓に努め、更に多くの学生に海外留学へのチャンスを与え、また海外大学の学生の受入れを通して、学生が国際的な視野を広げる一助になるよう一層努力していきます。



ニューサウスウェールズ大学 John Whitelock氏来学 ～新たな学術国際交流の展開を目指して～

平成27年8月31日（月）ニューサウスウェールズ大学（オーストラリア）のJohn Whitelock大学院生体医工学研究科長をお招きし、同大学医学部との学術国際交流協定の締結を検討するため、三宅養三理事長、佐藤啓二学長、渡辺秀人国際交流センター長との意見交換や同研究科長によるオーストラリアの医学教育制度などに関する特別講演などが行われました。

本学における国際交流関係事業として、平成27年4月に設置された国際交流センターでは、新たな学術国際交流協定大学の確保などを推進しており、今回の招聘は、まだ交流先がないオーストラリア地域での交流先を検討するために実施したものです。

ニューサウスウェールズ大学との学術国際交流に関す



講演するJohn Whitelock氏

る検討はまだ始まったばかりですが、今回の招聘が協定締結へつながることが期待されます。

コンケン大学医学部短期留学体験記

本学では、コンケン大学（KKU）医学部と平成23年度に学術国際交流協定を締結して以降、教育と研究における国際交流の促進を目指し、積極的に学生等の交流を行っており、プログラムの一環として、臨床実習選択（elective）コースへ本学医学部学生を派遣しています。

平成27年度のプログラムとしては、平成27年8月1日（土）から8月30日（日）まで3名、8月1日（土）から8月16日（日）まで2名、8月15日（土）から8月30日（日）まで2名の計7名の学生が留学しました。

この留学を終えた学生から寄せられた体験記をご紹介します。

「KKU臨床実習選択コース」への派遣者

医学部5学年次生 亥埜 亜希

私は8月1日から2週間タイのコンケン大学(麻酔科)に留学させて頂きました。留学中は勉強面だけでなく現地の学生や先生との交流を通じて、生活面でも沢山の体験ができました。勉強面では、手技ができる、英語が上達することなどが挙げられます。麻酔科実習では、先生がしっかり横に付いて頂いて、とても丁寧に教えてくださったため、最初はLMA挿入もできなかった私ですが、2週目後半になると積極的に先生やレジデントの方に手技をさせて欲しい旨を伝えて沢山の手技をさせて頂くことで気管挿管も手伝いなしにできるようになりました。他にもルートを探ることや、脊髄麻酔のお手伝いをさせて頂くこともできて、これは日本での実習にはない達成感だと感じました。

麻酔維持期は質問しやすい時間帯のため、麻酔についてはもちろん、両国の医学や文化の違い、観光についてなど様々な話が聞くことができ楽しい時間でした。この手技をさせて欲しいと伝えたり、維持期にお話しをするという細々としたコミュニケーションで英語が上達したと感じました。特に実感したのが、実習最終日に行うプレゼンテーションとインタビューで、初めての英語だけで行うプレゼンテーションでしたので、準備も発表もとても大変でしたが何とか発表できたのでとても良い経験になりました。この留学のおかげで、英語を話すことへのためらいやハードルが下がったと感じますので、将来医者として留学する機会を逃さないようこれからも努力していきたいです。



亥埜さん(左端)、吉田さん(左から2番目)、森さん(右から3番目)

医学部5学年次生 森 智世

タイでの留学は医学的、文化的にとっても充実したものでした。産婦人科や救急科ではサラセミアを始め、日本では見ることでできない疾患や、熱帯の地域ならではの疾患に多く触れることができました。タイでは医師不足の現状もあり、医師を育てることの重要性が理解されており、指導医のみではなく患者さんまでもが留学生である自分の実習に積極的に協力してくれました。タイの人々は親切で穏やかな性格の人が多く、現地の人々とも多く交流できました。

医療機器や設備の面では日本ほど充実していない場面も感じましたが、それを人の技術、知識や工夫で補おうと、非常に熱心に学び働く現地の医療者に身が引き締まる思いでした。

医学部5学年次生 吉田 奈央

私はコンケン大学で産婦人科、小児科でそれぞれ2週間実習させて頂きました。朝7時からの回診に始まり、現地の学生とともに毎日患者さんを問診、身体診察し、今後の治療方針やマネジメントについて、みんなでディスカッションするなどとても貴重な経験ができました。

タクシン政権時代に導入された30パーツ（約100円）制度によって、非保険加入者も医療を受けられるようになった分、医師や学生達が国家の金銭的負担を減らすために機材を極力使わず、丁寧な問診と身体検査で鑑別診断を挙げていく姿にカルチャーショックを受け、また、母国語と同様に医療英語を話し、疑問点があればすぐに英語論文にアクセスするタイの学生を見て、改めて英語の重要性和学生に求められるレベルの違いを感じました。

滞在中に側で学びを助けて下さったタイの先生方や友人達、家族への感謝の気持ちを忘れず、将来local, globalの両方の視点を持った医師になるためにこれからも英語学習を続けていきたいです。

医学部5学年次生 間瀬 宏美

今回、私はコンケン大学医学部の総合内科の病棟を中心に2週間実習しました。実習内容は、担当患者を複数もつ学生とともに毎日それぞれの患者の情報収集・検査などを行い、多くて1日4回ある病棟回診に参加することでした。コンケン大学では、内科を4～6年生の間で合計30週実習します。これは本学の約2倍です。更に、朝は7時から夜は遅くて22時まで、土日関係なく実習があります。このシステムから、コンケンの学生はとにかく臨床でたくさんの知識を身に付けているのだと感じました。

システム以外で印象的だったことは、メリオイドシス（類鼻疽）という世界でタイ北東部に一番患者数が多いといわれる症例を経験したことです。これは日本でも輸入感染症として存在する病気で、治療が遅れば重症化します。やはりコンケン大学留学の醍醐味は、現地特有の病気を実際に見て知ることができる点だと思います。それを機に新たな視点・興味を持つことができます。

私はこの留学でメリオイドシスを始めとして輸入感染症に興味を持ちました。これからは、世界を視野に入れて医学知識を身に付けたいです。また、たくさんの実習をこなしているタイの学生に負けないくらい、自分の実習から学ぶものの密度を上げたいと思いました。

医学部5学年次生 水野 舞

この度、大学の留学プログラムにて1か月間タイ東北にあるコンケン大学で留学する機会を頂くことができました。前半2週間は救急科、そして後半2週間は産婦人科でコンケン大学の学生とともに実習をしました。

実習では、日本のポリクリではできない体験ができました。コンケンの医学生は医師免許がないうちから、土日を含み毎日の回診、手術の手伝い、症例についてのディスカッション、当直等をこなしていきます。医学生が病院の中で信頼を得ているとともに、医療チームとしての責任を負っていることに衝撃を受けました。

最初は、会話が聞き取れず自分の無力さを感じましたが、次第に話せるようになり、様々な手技をさせてもらったり、当直に入らせてもらったりとタイの医療システムを学ぶことができる貴重な経験ばかりでした。

今回の経験を通じて、分からなくても諦めないことが大切ということ、むしろ分からないことに対し何もしないの方が、医師としての姿勢に反することを学びました。また、タイの医学生のレベルの高さ、そして勤勉さを感じて刺激を受け、彼らの日常を体験し、自分の勉強不足を痛感しました。この経験を今後生かしていきたいと思います。

医学部5学年次生 荒木 聡美

私はタイのコンケン大学医学部の産婦人科で、4年生9人のポリクリ班の一員として、2週間の臨床実習に参加しました。先生も学生も英語が堪能で、学ぶ環境に苦労はしませんでした。受け持ち患者さんの回診、学生主催の症例検討会、学生参加型の外来診察、ブタの会陰切開と縫合の実習、手術見学などを行い、最終日には各々英語でプレゼンテーションをする機会も頂き大変充実した実習内容でした。

タイと日本では、医学生を取りまく環境や医療制度に大きな違いがあることを実感し、日本に帰国してから医療を学ぶ際の姿勢を深く考えさせられました。“外界を知り初めて己を知る”というように、世界の人々の考え方や文化を知って、初めて自分の常識が覆され、世界から見た日本という新しい視点を知りました。

今回の貴重な経験を無駄にせぬよう、今後はより一層勉学に励みます。

医学部5学年次生 加川 葉月

私は産婦人科、救急科をそれぞれ2週間ずつ見学しました。産婦人科では、コンケン大学医学部4年生の学生グループに混じって、問診や内診をやらせてもらいました。救急科では、身体診察はもちろん、NGチューブの挿入や胃洗浄、尿カテーテルの挿入を6年生にやり方を教えてもらいながら挑戦しました。

また、救急車にも乗せて頂きました。タイの人々は、非常に親切で人柄が良い人ばかりで、学生はほとんど誰もが英語を話すことができ、質問すれば何でも丁寧に説明してくれました。そして、日本よりも実習において学生がより活躍し、病院の業務に参加している印象を受けました。

学生にもかかわらず、土日も関係なく毎朝7時に病棟回診を行ったり、数日に一度はイブニングシフトや当直をこなしたりと、日本とは比べ物にならないほどハードで驚きましたが、とても勉強しやすい環境で、たった1か月でしたがその環境の中で学べて本当に良かったと思います。



記念撮影
(左から加川さん、水野さん、コンケン大学の学生、
間瀬さん、荒木さん)

医学部学外体験実習体験記

近隣の老人保健施設や病院等にご協力頂き、医学部学生が学外体験実習を行いました。本院以外での実習は、学生にとって貴重な体験となったようです。実習を終えた学生の感想文をご覧ください。

自分に足りないことを学んだ実習

実習施設：森林公園通クリニック
4学年次生 中村 佳帆

三日間の実習を通して感じたことは、いかに自分自身の知識が少ないか、また、覚えたことをそれぞれ関連付けられていないということです。

今回の実習では、森林公園通クリニック院長の佐久間先生から様々な質問を投げかけて頂きましたが、その中で自分が答えられたことはほとんどありませんでした。しかし、それらは知識を関連付けて考えてみれば分かることであり、複雑に考えすぎず、もっと普段から様々なことに疑問を持ち、単純に考えていけば良いと教えて頂き、今までの単なる暗記で済ませていた勉強をとて反省しました。また、分からないと黙ってしまう場面も多く、分からなくても何かしらの発言をする積極性の重要さも実感しました。

実習をさせて頂いた森林公園通クリニックは透析医療が中心で、今まで透析の現場を見たことがなかったので全てが新鮮でした。まず、こんな近くにこんなにも多く透析を受けられている方がいることに驚きました。毎日30分程ずつ患者さんと一対一で話す時間を頂きました。患者さん本人も同じ驚きがあったとおっしゃっていましたが、その分自分と同じ境遇の方がこんなにたくさんいて、お互い話もできて少し安心したという話も聞かせて頂きました。

患者さんと話すのは単なる世間話ではなく、どのような流れで透析を受けることになったのか原因や家族歴、病歴、それまで健康診断などは受けていたのかなど健康に対する意識、透析をする前の気持ち、現在の気持ち、楽しみなどを聞くという課題でした。患者さんの気持ちに配慮しながら、限られた時間でたくさんの情報を聞き出すのは思っていたよりも難しかったです。透析することになった直接のきっかけだけでなく、それまでどのような経緯があったのか、家族歴はどうかなど初日は全く聞けず、その日ごとに先生に報告して足りない点を指摘して頂きました。なぜその内容が必要なのか一つずつ一緒に考えていけるようにしてくださり、自ら「確かにその情報は必要だ。ならば、これも聞いた方がいいな。」と気付くこともできました。趣味の話などになるとどんどん脱線してしまい、必要な情報がうまく聞き出せなかったこともありましたが、三日目には、初日や二日目に比べて、必要な情報を聞き出すことができるようになったのではないかなと思います。患者さんと話す時間を毎

日与えて頂いたことは、私にとってとても貴重なものとなりました。

また、透析についてもたくさん説明をして頂きました。二日目には、実際に透析を受けている最中の患者さんの横でその様子を見てフローチャートを書き、先生にチェックして頂きました。これもとても分かりやすく、自分が見落としている点、機械がどのように作用し、どのポイントにも重要な役割があるということに気付かせて頂きました。そのことによって、初日はほとんど無知だった透析についても、三日目には仕組みなどを理解することができました。

今回の実習では、いかに自分が何も知らないのか、どのように考えていけばいいのか、どのように患者さんを診ていけばいいのかなど、たくさんのことを学ぶことができ、本当に自分の為になる実習でした。森林公園通クリニックで実習ができて、本当に良かったです。

佐久間先生を始め、クリニックのスタッフの皆さんに感謝いたします。



実習で感じた信頼と安心

実習施設：名東老人保健施設
3学年次生 宮嶋 拳三

この度、私は名東老人保健施設にて実習を行った。

初日、朝礼にて報告会を見学した。参加している職員の方の様子はいたって厳粛なものであった。その後軽いレクリエーションを受け、続けて副施設長の講義を受けさせて頂いた。内容は老人保健施設の役割、そして実態であった。少子高齢化に伴い、保健施設の需要や負荷が増している一方で、我々医師となる人間がどのようなことを考え、行動していくべきかを考える貴重な機会を頂いた。

このことを念頭に置いた上で実際に施設での実習が始まり、入所者の方の介護の必要性に応じて軽度の方は2階、重度の方は3階と区分けされていた。私はそこに深い断絶があるのではないかと勝手に予想をしていたのだが、その予想はほどなく裏切られることとなった。

確かに自分で歩行できるか、身の回りの所作がこなせるかどうか等で、職員の方の介護面での動きに違いこそあったが、人間対人間の関わり合いとしての態度の差はそこには一切感じられなかった。もちろん認知度の違いなどによって、どのような言葉や行動が返ってくるかというのは入所者の方一人ひとりによって異なっていたが、職員の方は大いなる優しさをもって目を配り、言葉を掛けていらっしやう。また、身の回りの介助についても全てをこちらが行うのではなく、それぞれの入所者の方ができる範囲を考慮しながらその自立を促していらっしやうであった。

更に今回の実習において、私は2階の方、3階の方の両方と多くのコミュニケーションをとらせて頂いた。しっかりとした受け答えのできる方から、そうでない方まで様々な方がいらっしやうだったが、私が等しく感じたのは大きな信頼と安心であった。

入所者の方は色々なお話を伺う中で、見ず知らずの私を邪魔にせず朗らかに接して下さったが、その基盤には「人」というものを尊重し身体拘束を排除したり、先ほど述べた職員の方の行動であったり、日々病院の改善に努める事務の方であったりと、名東老人保健施設そのものに対する信用とやすらかな思いがあるのではないかと感じた。

私は今回の実習で、自分の知らなかった介護のかたちというものに少し触れることができたように思う。今回実習に行かせて頂いた名東老人保健施設の入所者の方には、確かにコミュニケーションをとることが難しい方もいたが、しかし何時も親密に看病や交流を持っている職員の方との間には強い信頼関係があるように感じた。

私は将来患者と心通わせることのできる医師になりたいと考えている。将来の目標像に近づくためには、今回の実習は非常に有意義であったと思う。今回学んだ気持

ちの通わせ方を基に、今後とも努力していくつもりである。

最後に、今回未熟な我々を実習生として受け入れてくださった名東老人保健施設の方々には心よりお礼申し上げます。本当にありがとうございます。



平成27年度看護学部キャンドルセレモニー挙行

平成27年10月10日（土）午前10時から、大学本館たちばなホールにおいて、2学年次生を対象とした平成27年度看護学部キャンドルセレモニーが挙行されました。

実習衣をまとい凛々しい瞳を輝かせた2学年次生が入場すると場内は静粛となり、キャンドルセレモニーが厳かに始まりました。

初めに佐藤啓二学長から、「看護学を学び極め患者さんのため、看護学の発展のため、本日の誓いを新たにしておいて今後とも頑張ってください。」との式辞が述べられました。

続いて、衣斐達看護学部長から、看護の道を進む者の誓いとして始まったキャンドルセレモニーの経緯やフローレンス・ナイチンゲールの歴史と受け継ぐべく精神などの講話があり、「看護する上で必要な知識と技術を身に付け、真に有能な看護師としての使命を持ち続け、努力をしていく中で人格を磨いて頂きたい。」とのメッセージが贈られました。



引き続き行われた「キャンドルサービス」では、篠田かおる准教授から学生一人ひとりの名前が読み上げられ、各々が緊張した面持ちで、八島妙子教務学生部長から手渡された燭台に、ナイチンゲール像から灯火を受け継ぎました。

その後、106名全員で「誓いの言葉」を述べ、愛知医科大学看護の歌「愛の使命」を合唱し、キャンドルセレモニーは厳粛な雰囲気の中、無事終了しました。

キャンドルセレモニーは、ナイチンゲールの精神を受け継ぎ、看護職者となるための決意を新たにするとともに2学年次生の実行委員が中心となって企画し運営しているものです。

参加した学生には、この日の誓いを忘れることなく、これから本格的に始まる臨地実習をはじめ、更に学業に専念して看護の本質を学び、誇り高き看護職者になることが期待されます。

特定行為に係る看護師の研修制度に基づく研修機関の指定

保健師助産師看護師法の一部改正により、平成27年10月1日から手順書により特定行為を行う看護師に対し、「特定行為研修」が義務付けられました。

これに伴い、本学大学院看護学研究科では、厚生労働省に同研修を行う研修機関の申請を行い、このたび指定を受けました。

本研究科（クリティカルケア看護学領域）では、厚生労働省令で定める38行為21区分全ての研修を2年間の大

学院教育に含めて行うこととしており、修了者は、修士（看護学）の学位が授与されるとともに、特定行為研修修了者として厚生労働省に登録されます。また、日本NP教育大学院協議会のNP資格を取得することができます。

本研究科では、平成28年度入学生の学生募集を行っております。

興味のある方は是非お問い合わせください。

◆ 特定行為に係る看護師の研修制度に関する詳細は、厚生労働省のホームページをご覧ください。

URL: <http://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/0000077077.html>

入試情報

○平成28年度大学院看護学研究科入学試験（第2次）実施 [学生募集要項配布中]

試験日：平成28年2月3日（水）

○入試等に関する問い合わせ先：看護学部教学課大学院係 0561-61-5413（直通）

※入学試験に関する詳細は本学ホームページでご確認ください。

平成27年度第1回医学部FDセミナー開催

平成27年10月1日（木）シミュレーションセンターにおいて、平成27年度第1回医学部FDセミナーが開催されました。

今回は、岡山大学医療教育統合開発センター副センター長・シミュレーションセンタープログラムディレクターの万代康弘先生をお招きし、「成人学習の要素とプログラムデザイン」と題し、ご講演を頂きました。その後、参加者は関連分野別に7グループに分かれ、「各診療科・講座で実現可能なActiveLearning（能動的学習）」というテーマで具体的な教育内容をディスカッションし、発

表しました。

基礎医学分野、臨床医学分野それぞれの対象学年に応じた教育内容が提示されました。これらは、ぜひ来年度から積極的に取り入れていきたい内容ばかりでした。また、初期研修医に着目したグループもあり、今後、医学生から初期研修医まで継続的な「能動的学習」が進められることが大いに期待されます。

医学部では、引き続き本学における医学教育の国際認証を目指して、教員FDにおける更なる教育プログラムの改革を進めて参ります。

先端医学研究センター 第15回研究セミナー開催

平成27年10月13日（火）18時から、大学本館701会議室において、先端医学研究センター第15回研究セミナーが開催されました。

同センターでは、若手研究者の育成支援・研究活動の促進を目指して、定期的に研究セミナーを開催しております。今回は若手研究者による研究活動の支援と学内共同研究の活性化を目的に、若手研究者による研究成果発表会として開催されました。

当日は、住友誠先端医学研究センター長のあいさつに続き、本学で研究に取り組む3名の若手研究者が自身の研究活動のきっかけ・取り組み方、現在の研究成果及び今後の展望などについて発表しました。会場では、若手研究者を中心に30名近くが熱心に耳を傾け、発表後には活発な質疑応答もなされるなど、本学における研究活動



の活性化に向けて意義ある場となりました。

先端医学研究センターでは、今後も研究活動の一層の活性化と若手研究者に対する支援を推進していきます。

学生相談室・職員相談室の移転

大学キャンパス整備の一環として、大学本館7階の「学生相談室」及び研究棟2階の「職員相談室」が、平成27年9月11日（金）にD棟7階（東側）に移転しました。

ハラスメントは、人としての品格と尊厳を著しく損なう人権侵害行為であるとともに、就学・就労・教育・技

術の環境を著しく悪化させる行為でもあります。本学園は、その防止に全力を注ぐと同時に、発生した場合は被害者本位の救済に努めております。

【学生相談室】内線：22880・22881

【職員相談室】内線：22882、PHS：77744

平成27年度第1回ハラスメント防止講演会開催

ハラスメントの防止に係る啓発活動の一環として、平成27年9月2日（水）午後5時45分から大学本館202講義室において、本年度第1回目となるハラスメント防止講演会が開催され、49名の参加がありました。

当日は講演会に先立ち、ハラスメント防止委員会委員長の岡田尚志郎医学部長から、「医療機関は、一般企業と異なり、特別な職場環境にあると言えます。医師、看護師、コメディカル、事務などそれぞれバラバラに各自の職務を行えば良いというのではなく、患者さんの満足度を得るためには医療チームとしてより効率的、かつ適正な医療サービスを提供することが求められます。ハラスメント防止対策を進めることで、風通しの良い組織、専門性や立場の壁を越えた職場環境が構築され、医療チームとしての機能がより向上されるように思われます。本日の講演を聞いて参考にして頂きたいと思います。」とのあいさつがありました。

講演会終了後に提出頂いたアンケートの結果、講演内容については「大変良かった（19%）」と「良かった（47%）」を合わせて66%の方から好評を頂きました。また、今回初めてQ&AのDVDを視聴して頂きましたが、「理解が深まった。」、「分かりやすかった。」、「パワーハラスメントについて改めて自分を振り返ることができました。」、「事例を通してパワーハラスメントをわかりやす



岡田委員長



く学べて良かった。」などの意見がありました。

最後に監査室から、学内貸出しを行っている「ハラスメント防止関係DVD」を職場研修用として活用頂きたい旨の案内がありました。

キャンパスハラスメント防止講習会開催

平成27年10月23日（金）17時30分からたちばなホールにおいて、キャンパスハラスメント防止講習会が開催され、医学部生約150名が参加しました。

当日は講師に岩月りつ子氏（公益財団法人21世紀職業財団客員講師）をお迎えし、大学生活や部活動でのハラスメントの防止・抑制についての説明を受けました。

内容は、6つの代表的なハラスメントの種類の説明から始まり、アカデミックハラスメントのセルフチェックなど、とてもわかりやすい内容でした。

本学は、学生たちがハラスメントのない充実したキャンパスライフ送れるようサポートしていきます。

高校生の一日看護体験研修実施

平成27年8月5日(水)に、愛知県内の県立長久手高校、名古屋市立名東高校、私立聖霊高校、栄徳高校の4校から29名の高校生の参加により、一日看護体験研修が行われました。

研修に先立ち、小池三奈美看護部長からあいさつがあり、「一日看護師」としての辞令交付を受けた後、ナース服に着替え各病棟にて看護業務の一部を体験しました。

始めは、緊張した面持ちでしたが、時間が経過するうちに患者さんと会話している様子が伺え、車椅子を引いたり、食事の介助をしていく中で少しずつ慣れ、笑顔が見られるようになりました。

午後からのドクターヘリの見学では、間近で見るヘリコプターに興味をもち、写真撮影などをしていました。

研修終了後に行ったアンケート調査において、「体験前より看護師さんになりたい気持ちが大きくなった。」「看護師さんの大変さが分かった。」「体力と機転が必要。」「患者さんから感謝された。」などの意見があり、



参加学生での記念撮影

高校生にとっては新鮮で貴重な体験を通して、命の尊さを学んでもらい大変有意義で充実した研修となりました。

参加した高校生が今回の体験を通して、「看護」の素晴らしさを理解し、将来は看護師を目指してくれることを願っております。

医療安全・感染予防合同講演会開催

平成27年8月6日(木)午後5時30分から本館たちばなホールにおいて、医療安全・感染予防に関する合同講演会が開催されました。

講演会では、仁邦法律事務所所長の桑原博道先生を講師としてお迎えし、「医療訴訟事例から見たインフェクションコントロール」と題して講演して頂きました。桑原先生は、医療訴訟(医療側)を専門とする弁護士で、青森から熊本まで約70の医療関係機関の顧問弁護士を務

められております。

今回は感染対策の医療訴訟に関して、様々な判例を紹介頂き、参加した多くの職員は大変勉強となりました。

また、この講演会は厚生労働省の指導により病院職員が全員参加することとなり、当日参加できなかった職員には、DVDを貸し出して病院職員全員が視聴できるように努めています。

平成27年度第1回保険診療に関する講習会開催

臨床研修病院においては、全職員を対象とした保険診療に関する講習が、年2回以上実施されていることが必須とされており、平成27年度第1回保険診療に関する講習会が、平成27年8月20日(木)午後5時30分から大学本館たちばなホールにおいて、株式会社アイブレインの今西陽一郎氏を講師にお迎えし、「DPCから見た愛知医科大学病院」と題して開催されました。

講習会では、本院の経営指標の前年度比較や周辺病院との症例数比較、大学病院間のベンチマーク、DPC別

の日数と入院収入の関係や曜日別の入院延患者数、入院収益、入院単価等を分かり易く解説・説明して頂き、「入院収入を上げるための具体策」について講演して頂きました。

講演会には、医師、臨床研修医、コメディカル及び事務職員など幅広い職種から252名の参加があり、医療収入の増収・増益が求められる中、医療収入に多大な影響を及ぼす入院医療費に対する職員の関心の高さを窺い知ることができました。

臨床研修指導医のための教育ワークショップ開催

平成27年8月29日（土）・30日（日）に東京第一ホテル錦で、今回で11回目となる臨床研修指導医のための教育ワークショップ（WS）が開催されました。

厚生労働省監督の下、開催されたこのWSには、院内から24名、学外から7名の計31名が参加しました。そのうち12名は、平成16年度に施行された新医師臨床研修制度により、臨床研修を修了した若手医師の参加でした。

春日井邦夫卒後臨床研修センター長を始め、池田洋教授（病理学講座）を中心とした運営陣に加え、学外からも名古屋大学大学院医学系研究科総合診療医学の伴信太郎教授、藤田保健衛生大学学長補佐（教育担当）の松井俊和教授をタスクフォースとしてお迎えし、「研修医にとって良い指導医とは」をテーマに2日間にわたりグループ作業を中心としたWSが行われました。

また、厚生労働省東海北陸厚生局から宮田靖志臨床研修審査専門官をお招きした特別講演、株式会社エスアールエル日本医業経営コンサルタントの浅田均氏によるコミュニケーションスキル研修も行われました。



参加者による記念撮影

受講者からは、「他科、他施設の様々な現状や立場を知る機会となった。」、「自分の指導医としての未熟さを改めて考えた。」、「グループ全員で問題意識を共有できた。」など活発な意見がありました。

このWSを受講された指導医の方々を核に、更なる臨床研修の充実が期待されています。

医療法の規定に基づく立入検査

毎年行われる医療法の規定に基づく立入検査が、今年度は平成27年10月9日（金）に実施されました。

午前中は、特定機能病院としての医療法関係規定等に基づく管理・運営状況、安全管理全般に関する実施計画、実施状況を中心に書類審査と各担当者との質疑応答が行われました。午後からは、厚生労働省東海北陸厚生局の医療監視員と愛知県医務国保課職員及び瀬戸保健所の各部門担当調査員による、病棟や薬剤部、臨床工学部等の視察と実地指導が行われました。

視察及び実地指導終了後、厚生労働省東海北陸厚生局医療指導監視監査官と瀬戸保健所長から今回の立入検査の講評が行われ、「概ね良好な運営状況であった。今後、医療安全対策の更なる改善と職員の健康診断の受診率向上に努めて頂きたい。」との要請がありました。

この講評の後、羽生田正行病院長から今回の指摘事項について、「ご指摘頂いた事項について真摯に対応し、早急に改善していきたい。」と抱負を述べ、今年度の立入検査は終了しました。

NAVIT 海外メディアから取材

本院に導入している患者案内端末NAVITは、テレビや雑誌など多くのメディアに取り上げられておりますが、今回中東や北アフリカでテレビ放送とラジオ放送を行っているBBC ArabicからNAVITの取材依頼があり、平成27年10月5日（月）にNAVITの活用方法や利用状況について取材が行われました。



取材対応する秋田高典医事管理部長

第28回日本医師会認定産業医講習会を開催

産業保健科学センター長 小林 章雄

平成27年10月24日（土）第28回日本医師会認定産業医講習会を開催し、101名の先生方にご参加頂きました。

今回は、「産業医が知っておくべき最近の動向」をテーマに4人の講師の先生に講演をお願いいたしました。

本学医学部衛生学講座の梅村朋弘講師には「職場における化学物質管理」の基本から、労働安全衛生法の改正を踏まえたリスクアセスメントの進め方についてお話頂き、株式会社ティーコム代表取締役・ゆうあいクリニック院長の浦上年彦先生には「ストレスチェックと職場環境改善」について、ストレスチェックの問題点と対応に

ついて、事例を含めて解説頂きました。

また、浜松医科大学医学部看護学科地域看護学講座教授の巽あさみ先生には、「職場における睡眠保健指導」として、保健指導について実践的な立場からお話を頂き、聖隷健康診断センター主任医長の内野明日香先生には、「職場巡視の留意点」について、現場の写真を使って詳しく具体的に解説して頂きました。

遠く県外からご参加の先生方も含め、長時間にわたり熱心に受講して頂きました。なお、次回は3月に開催の予定です。

新規採用職員学内フォロー研修・事務管理職勉強会

事務部門では、平成27年度の新規採用職員に対し、配属後半年を一つの区切りとしたフォロー研修を実施しています。今年度は、愛知県労働協会が主催する「新入社員ステップアップセミナー」に7名全員で参加し、他の民間企業の新入社員の方々とともに研修を受講しました。学外での研修受講の後日には、学内でフォロー研修を実施し、研修受講報告書をまとめて全員で報告し、学びと気づきの共有を行いました。合わせて、4月に立てた目標の振り返りをし、次の半年間の行動目標を明確にしました。参加した職員から「半年間の職場経験を経て、改めてビジネスマナー・コミュニケーションを学ぶこと

で、より深い学びの機会になりました。」と感想がありました。

また、管理職のリーダーシップ強化を目的とした取り組みとして、管理職勉強会を開催し、社会保険労務士の佐治泰直氏を講師に迎え、管理職に求められる「人間力」と「労務管理の知識」についての講義を行いました。

「職場リーダーに必要なものは、夢と希望と人間力である」をテーマに、ユーモアあふれる「人間力」を学びました。本学では、今後も継続的な管理職勉強会を実施していく予定です。

平成27年9月4日（金）「新入社員ステップアップセミナー」（愛知県労働協会）

平成27年9月18日（金）「新規採用職員学内フォロー研修」（大学本館7階701会議室）

平成27年9月25日（金）「事務管理職勉強会」（大学本館2階203講義室）





医学情報センター（図書館）からのお知らせ 入退館システムの更新

平成27年9月28日（月）から、医学情報センター（図書館）における新たな入退館システムの運用が開始されました。

この度の更新により、デザインが刷新されすっきりとした外観となり、ブックプロテクションは国内初、入退館システムは東海地域で二番目の導入となり、安心安全かつコンパクト化が図られ、外観を損なうことなく開放的な空間が演出されています。

また、従来の入退館システムでは、入館者数しか計測を行うことができませんでしたが、新システムでは、図書館の滞在者数を新たに計測できるようになりました。これは、図書館サービスの改善に利用できるだけでなく、災害時等の安全確認もスムーズに行うことができますようになります。



利用者の皆さまには退館時にも学生証、職員証等が必要となりますがご了承願います。

英語論文執筆 & 投稿支援セミナー開催

平成27年9月18日（金）医学情報センター（図書館）と国際交流センターとの共催で、大学本館講義室において、英語論文執筆&投稿支援セミナーが開催され、教職員を中心に21名の参加がありました。

セミナーは、エダンズ株式会社のシニアエディターのDr. Trebor Lane, Dr. Ruth Tunnを講師にお招きし、英文個別セッションと論文の書き方などについての2部に分かれて講演が行われました。第1部では、事前に提出された英文抄録の校正文を基に個別セッションを行い、第2部では、論文の執筆の計画から始まり、効果的な書き方、更にはエディターとのコミュニケーションのとり方などについて説明がありました。

医学情報センター（図書館）では、今後も研究者向けの英語論文執筆の支援を行っていきます。



医中誌索引講習会「5分で論文の主題をつかもう」共催

平成27年10月15日（木）マルチメディア教室において、医学情報センター（図書館）と医学中央雑誌刊行会との共催で、学生及び教職員を始め、他図書館職員等の60名が参加されました。

医学中央雑誌刊行会の担当者が講師を務め、日本語論文を検索する上で欠かせない医中誌Webの索引作業を通して、論文の主題をつかむヒントを得るための講義、実習を行いました。当日は参加者の回答をWeb上で集計し、グラフ等で共有するといったインタラクティブな実習で、初級・中級・上級と徐々に難しくなり、上級では原著論文に索引付けをしました。

参加者からはデータベース検索における「キーワード



検索」や「シソーラス検索」に役立つといった声がありました。

医学情報センター（図書館）では、今後も様々な講習会の企画・立案を行っていきます。

生物学 武内恒成教授 平成27年度公益財団法人三菱財団自然科学研究助成採択

医学部生物学の武内恒成教授が、平成27年度三菱財団自然科学研究助成の採択を受け、平成27年9月10日（木）三菱商事ビル三菱財団本部において、贈呈式が執り行われました。

同研究助成は、助成を受けた研究者の中から4名のノーベル賞受賞者や多くの文化勲章・文化功労賞受賞者を輩出するなど卓越した研究者に贈られるもので、武内教授のこれまでの研究業績及び今回の研究課題「糖鎖発現制御による神経回路制御機構の解析と神経再生への試み」が高く評価され採択に至りました。

また、武内教授は今回の研究課題の他、文部科学省及び独立行政法人日本学術振興会の科学研究費助成事業研究代表者や国立研究開発法人日本医療研究開発機構（AMED）の委託実験調査研究代表者を務めており、更



武内教授

なる研究成果が期待されています。

武内教授から「大変に光栄に思っております。教育活動とともに益々の研究推進にも努めて参ります。」と感想がありました。

脳神経外科学講座 竹内幹伸講師 第4回中部MISt研究会 優秀演題賞受賞

平成27年9月12日（土）富山県民会館で開催された中部MISt研究会において、脳神経外科学講座の竹内幹伸講師が優秀演題賞を受賞されました。

同賞は、同会で発表されたドクターセッションの演題の中から、竹内講師が発表した「術中バンコマイシン散布は術後創部感染を減らすことができるか？二重盲検ランダム化比較試験」が学術的に高く評価されたものです。

表彰を受けた竹内講師から「この賞を頂けたのも、整形外科の神谷光広准教授、平澤敦彦助教、脊椎脊髓センターの若尾典充講師、そして、高安正和教授と脳神経外科医局員の皆さん、そして何より松浦克彦教授を始めとした薬剤部の皆さんのおかげです。賞をもらえたこと以上に、チームとしての研究が形になったことが嬉しいで



薬剤師チームと撮影（竹内講師：写真中央）

す。これからも、愛知医科大学から世界に情報発信していきたい。」と感想がありました。

病院経営企画課(兼 病院管理課) 中島里美主事 ボランティアコーディネーション力1級検定合格

病院経営企画課(兼 病院管理課)の中島里美主事が、(特非)日本ボランティアコーディネーター協会(JVCA)が実施するボランティアコーディネーション力1級検定に合格されました。1級合格者は、全国で56名を数えますが、病院ボランティアコーディネーター(VC)は、全国で初めての合格者となります。

VCは、単にボランティアしたい人と受け入れたいニーズをつなぐという狭い意味だけの機能ではなく、ボランティアコーディネーション機能を業務として担う専門職で、「一人ひとりが社会を構成する重要な一員であることを自覚し、主体的・自発的に社会の様々な課題やテーマに取り組む」というボランティア活動の意義を認め、その活動のプロセスで多様な人や組織が対等な関係でつながり、新たな力を生み出せるように調整することにより、一人ひとりが市民社会づくりに参加することを可能にする役割を担います。

同検定に合格された中島主事から、「本院のボランテ



ボランティアさんと一緒に(写真中央)

ィアセンターは、ボランティアさんの笑顔であふれ、毎日、多くの患者さんから『ありがとう』の言葉を頂いています。今後も、この笑顔がたくさんの患者さんやご家族の皆さんへ届くよう、活動を充実させていきたいと思っています。」と感想がありました。

学生クラブHIAMU

「医療ケアを必要とする子どもと家族のための映画上映会」に参加

平成27年6月14日(日)瀬戸旭医師会館において、医療ケアを必要とする子どもとその家族を支援することを目的に映画上映会と、上映会の中で小児在宅ケア研修会が開催されました。

この上映会は、瀬戸旭医師会を始め、瀬戸市の柘訪問看護ステーション、学生クラブHIAMUが中心となって、映画館で映画を見たことがない子どもたちを楽しませるだけでなく、その家族には休息を、また、訪問看護ステーションの看護師が小児の在宅医療ケアを学ぶ場として企画・運営され、当日は15名の子どもたちとその家族が参加しました。

本学からも、看護学部の佐々木裕子准教授を始め、HIAMUの学生が運営スタッフとして参加し、子どもたちの付き添いや映画上映の補助、子どもたちの兄弟たちとシャボン玉やカードゲームをしながら楽しみました。

HIAMUのボランティア部門の班長である医学部4学年次の都築侑介さんからは、「私たちは、まずこの活動の主体となるチーム『もーやっこジュニアの広場』を立ち上げました。これは、様々なひとの舳(もやい=繋がり)を作り、かつてはどこにでもあった『ひろば』のような存在でありたいという思いから結成をしました。今回の活動の目的は、二つあり、小児在宅ケアを行っている家族の様子を、在宅小児を受入れたことがない訪問看護ステーションの皆さんに広く知ってもらい、子どもたちには映画を通して、多くの人と楽しみを分かり合え



会場で記念撮影

る場を作りたかったからです。その中で私たちHIAMUは、子どもたちとその兄弟を楽しませることを目標に、色々な意見やアイデアについて議論し、子どもたちと家族が一つの大切な思い出として共有できるように力を出しました。そして、忘れられない貴重な経験をすることができました。このような形で小児の在宅ケアを広め活性化しようという取組みは日本では例はなく、世界でもあまり聞いたことはありません。このような会に参加できたことは、どのスタッフにとっても良い経験になったと思います。また、次回は来年3月に瀬戸市で開催する予定です。今後は、市や県を大きく巻き込み、他の地域でも実施できるものを目指したいと考えています。」と感想がありました。

● 一般財団法人愛知医科大学愛恵会 ●

第3回主催公演事業～医大祭とコラボレーション開催～

平成27年10月31日（土）、11月1日（日）の2日間にわたり、一般財団法人愛知医科大学愛恵会主催の平成27年度第3回公演事業が、第42回医大祭と合同で開催されました。

初日には、Satomiさんと安藤大樹さんのトーク＆ライブが中央棟2階において行われました。Satomiさんが自分の体験談を時折交えつつ、SMAPの「世界に一つだけの花」を観客の皆さんと一緒に手話を交えて歌われたり、また、童謡「赤とんぼ」を歌われた際には、ご年配の方々もとても懐かしそうに口ずさんでいました。

体験教室では、アロマによるハンドマッサージ、毛髪技能士による頭皮チェック、フラワーアレンジメント教室、絵手紙教室が開催され、どの教室も多くの参加者が賑わっていました。

二日目は、人形劇団ぼけっとによる人形劇がオアシスホールにおいて上演され、患者さんや小さなお子さん連れの地域住民の方が多数観劇しました。また、今回で3回目となる津軽三味線の岡野兄弟を中心としたグループの皆さんによるコンサート（津軽三味線&パーカッション&ピアノ）が開かれ、パワフルかつダイナミックな演

奏が行われました。

更に、外来レストラントラスでは、全盲の歌姫若渚さんとピアニストの丸山晶子さんによるトーク＆ライブが行われました。24時間テレビ等に出演した際のエピソードなどを時折織り交ぜながら歌う若渚さんの迫力ある歌唱力や、丸山さんの心の底に響く素晴らしいピアノ演奏に皆さんが真剣に聞き入っていました。

体験教室では、紙アクアリウム教室が開催され、自分の描いた絵が水槽を模した幅6メートルの巨大スクリーンに映し出されると、お子さんだけでなく親子で喜ぶ姿が見受けられ、「とても楽しかった。」「面白かった。」といった感想がありました。また、フラワーアレンジメント教室、お茶の美味しいいれ方教室、アート・バルーン教室が開催され、中でも、風船王子のアート・バルーン教室は大盛況で、軽妙なトークと細長い風船を組み合わせで作られる芸術的な作品の数々に子供から大人まですっかり魅了されていました。

その他にも、特設コーナーでは、JAあいち尾東の全面協力を得て2日間にわたり、産直（野菜）販売が行われ、大変好評でした。



トーク＆ライブ



コンサート



アート・バルーン教室

本学に関する新聞掲載記事（概要）をご紹介します。

<遊園地やプール 熱中症対策強化>

災害医療研究センター 小澤和弘助教

家族連れなどでにぎわう遊園地やプールでは、アトラクションなどに長蛇の列ができるとあって、施設側も利用客も、熱中症対策が欠かせない。

愛知医科大災害医療研究センター助教で救急救命士の小沢和弘さんは、熱中症を避けるためには、体の表面と体内の両方から体温を下げる工夫が必要と指摘する。

高温の日にやむなく外出する場合、帽子や日傘を使ったり日陰に入ったりして直射日光を浴びないのが鉄則。首に掛けたり、持ち運んだりできる小型扇風機も自分の周りの温度を下げるのに役立ち、皮膚に貼るアルコールを含んだ冷却シートも有用という。さらに、汗をかいたら塩分が入った冷たい飲み物をこまめに口にして、体内から冷やす。

子どもや高齢者は熱中症になりやすく、健康な大人でも抵抗力が落ちている睡眠不足の状態、脱水症状のある二日酔いときは特に注意が必要。小沢さんは「外にいるときに少しでも気分が悪くなったら、冷房の効いた屋内や日陰で体を休めて」と対策を呼び掛ける。

(2015年8月2日(日) 中日新聞朝刊より抜粋)

「中日新聞社許諾済」

<帯状疱疹早く治療を

痛み長引く恐れ 「神経痛」に移行も>

皮膚科学講座 渡辺大輔教授

皮膚の表面と内部の神経に激痛が走り、帯状の赤い水ぶくれができる帯状疱疹は、高齢期に発症しやすく、4～5%の人は1年以上痛みが長引く。発症時にできるだけ早く治療を始めることが、痛みが長引く可能性を減らすことにつながる。患者が今後増えるという予測もある。

愛知医科大の渡辺大輔教授（皮膚科）は「50歳を過ぎると発症のリスクが上がる。大きな病気や精神的、肉体的な疲れも、発症の引き金になる」と話す。

体の片側だけに症状が出るのは、神経節の1カ所からウイルスが出ると、免疫力が高まって、他の神経節からはウイルスが出にくくなるためと考えられている。

治療の基本は、飲み薬などの抗ウイルス薬で、ウイルスの増殖を抑えること。痛みがひどい場合は、鎮痛薬を用いることもある。「皮膚に症状が出て72時間以内で、できるだけ早く治療を始めるのが効果的」という。

発症から3ヵ月以上続く痛みは、ウイルスが増えた際に神経が損傷したことで起きる「帯状疱疹後神経痛」。発症時の痛みを使う鎮痛薬は、基本的にこの痛みには効かないので、神経回路を強化する「三環系抗うつ薬」や抗けいれん薬のプレガバリン（商品名リリカ）、痛みが強い場合には医療用麻薬も使う。

渡辺教授は「発症者の1割ほどが帯状疱疹後神経痛になる。高齢者や、帯状疱疹の症状が重かった人ほど痛みが長引きやすい」。重症化を防ぐ早期の治療が、帯状疱疹後神経痛に移行する可能性を減らすことにもつながるといふ。

(2015年9月1日(火) 中日新聞朝刊より抜粋)

「中日新聞社許諾済」

<自分の発達障害「取扱説明書」>

「就労支援にも応用できる」>

リハビリテーション科 木村伸也 教授(特任)

45歳の時に初めて発達障害という診断を受けた男性がいる。社会に出て責任を持たされてから壁にぶつかったが、自分の不得意なことなどを列挙した「自分取扱説明書」を作り、行動する上での注意点を再確認している。

愛知医科大学の木村伸也教授(リハビリテーション)は「体の不自由な人が車いすを使うように、不得意な部分を道具で補って、社会の中でうまく生活を送れるようにするのが本来のリハビリテーション」と指摘する。

身体障害者の障害の特性やどんな生活を目指しているかを共通の尺度で把握して、リハビリプログラムに生かす取り組みは、10年ほど前から医療・介護現場で一般的に行われているという。「『自分取扱説明書』は、自分を客観視し、その認識を他者と共有することで、支援に生かしてもらい取り組み。就労支援や学習支援にも広く応用できる」と話す。

(2015年9月3日(木) 中日新聞朝刊より抜粋)

「中日新聞社許諾済」

<ウチの学食はみだしジャンボあなご丼>

愛知医科大学のレストランオレンジのお勧めは「はみだしジャンボあなご丼(500円)」です。丼からはみ出た天ぷらを見ると元気が出ます。

丼は、アナゴ2匹を丸々使っています。サクッと揚げた天ぷらと甘辛いたれの染みたご飯と一緒にほおばれば、はしが止まりません。午前中、3コマの授業を受けておなかペコペコになっていても満足します。

量だけじゃないんです。アナゴは目に良いとされるビタミンAも豊富。食べれば、疲れ目に染み渡るような御利益もありそうです。ブロッコリーとナス、レンコンの野菜の天ぷらも入っていて、栄養のバランスも取れています。

食堂を経営する社長は「自分が学生だったとき食べたかったものを」という思いで、メニューを考えられます。

学食には漬物とふりかけが3種類ずつあって、食べ放題、かけ放題。食堂に来ると、学生たちの白いご飯がカラフルに彩られているのを見られます。

料理を作ってくれる人たちの笑顔にも癒やされます。

(2015年9月29日(火) 中日新聞朝刊より抜粋)

「中日新聞社許諾済」

学 術 振 興

学 位 授 与

◆大学院医学研究科



小林 郁生

学位授与番号 甲第453号

学位授与年月日 平成27年 9月17日

論文題目：「Penetration of piperacillin-tazobactam into human prostate tissue and dosing considerations for prostatitis based on site-specific pharmacokinetics and pharmacodynamics (Piperacillin/tazobactamの前立腺組織への移行性と部位特異的PK-PD解析に基づいた前立腺炎に対する投与法の検討)」



桑原 裕子

学位授与番号 乙第376号

学位授与年月日 平成27年 9月17日

論文題目：「Arousal electrical stimuli evoke sudomotor activity related to P300, and skin vasoconstrictor activity related to N140 in humans (ヒトにおいて覚醒電気刺激はP300に関連する発汗神経活動とN140に関連する皮膚血管収縮神経活動を誘発する)」



小林 邦生

学位授与番号 乙第377号

学位授与年月日 平成27年 9月17日

論文題目：「Diagnostic Accuracy of Real-Time Tissue Elastography for the Staging of Liver Fibrosis: A Meta-Analysis (Real-time tissue elastographyによる肝線維化評価の診断精度に関するメタ解析)」

◆大学院看護学研究科



橋本真紀代

学位授与番号 第74号

学位授与年月日 平成27年 9月28日

論文題目：「療養型病床を有する病院に対する感染対策の支援前後の評価」



畠山 和人

学位授与番号 第75号

学位授与年月日 平成27年 9月28日

論文題目：「A病院のNICUとGCUにおけるMRSA保菌のリスク因子の検討」



二村 純子

学位授与番号 第76号

学位授与年月日 平成27年 9月28日

論文題目：「地域での健康づくり活動における男性健康推進員の体験の特徴」

研究助成等採択者

○一般社団法人日本損害保険協会 2015年度交通事故特定課題の研究助成

- 氏名 内藤宗和 (解剖学講座・准教授)
- 研究題目 慢性疼痛モデルを用いた急性期リハビリテーションにおける精神薬物療法の併用方法・併用効果に関する基盤的研究
- 助成金額 3,000,000円

○公益財団法人愛知県がん研究振興会 第40回(平成27年度)がんその他の悪性新生物研究助成金

- 氏名 増渕 悟 (生理学講座・教授)
- 研究題目 癌組織と宿主個体の概日リズム相互作用の解明
- 助成金額 250,000円

○公益財団法人豊秋奨学会 平成27年度研究費助成

- 氏名 伊藤清顕 (内科学講座(肝胆膵内科)・准教授)
- 研究題目 B型肝炎ウイルス複製機構と宿主糖鎖機能との関連
- 助成金額 1,500,000円

○公益財団法人日東学術振興財団 第32回(平成27年度)研究助成

- 氏名 岩山秀之 (小児科・助教)
- 研究題目 AAV9を用いたMCT8変異による甲状腺ホルモン輸送障害の遺伝子治療の開発
- 助成金額 1,000,000円

○公益財団法人日東学術振興財団 第32回(平成27年度)海外派遣助成

- 氏名 伊藤清顕 (内科学講座(肝胆膵内科)・准教授)
- 海外派遣先 アメリカ肝臓学会(米国)
- 助成金額 300,000円

本学講座等の主催による学会等

【学会名】	【開催日】	【会長等】
・第46回胎児・新生児神経研究会・脳性麻痺神経学の会 合同研究会	平成27年 8月29日(土)	奥村 彰久
・第38回総合リハビリテーション研究大会	平成27年 9月18日(金)・19日(土)	木村 伸也
・第15回日本内分泌学会東海支部学術集会	平成27年 9月26日(土)	今井 常夫
・第80回私立医科大学病院中央検査部技師長研修会	平成27年10月23日(金)	岸 孝彦

第46回胎児・新生児神経研究会・ 脳性麻痺神経学の会 合同研究会

平成27年8月29日(土)名古屋大学医学部附属病院鶴友会館において、第46回胎児・新生児神経研究会・脳性麻痺神経学の会合同研究会を開催しました。

胎児・新生児神経研究会は、約25年前に新生児医療に携わる医師が周生期に生じる脳障害について検討する会として発足し、脳性麻痺神経学の会は、平成25年に始まった研究会で、発達期の脳障害を成人の神経学とは異なる視点で研究することを主たる目的とした会です。この二つの研究会の合同研究会は初めての試みでした。

当日は三つの特別講演と七つの一般演題の発表があり、特別講演はいずれも先進的な内容であり、参加者に

小児科学講座・教授 奥村 彰久
よい刺激になったと思います。一般演題も興味深い内容ばかりであり、活発な討議が行われました。日本全国から63名の参加がありましたが、医師のみならず理学療法士などのコメディカルスタッフの参加があったのも合同研究会の意義であったと思います。

本合同研究会の開催に当たり、一般財団法人愛知医科大学愛恵会からご支援を頂いたことに深く感謝いたします。また、講座関係者・名古屋大学小児科医局関係者・順天堂大学小児科医局関係者にご協力頂き、心よりお礼を申し上げます。

第38回総合リハビリテーション研究大会

平成27年9月18日(金)・19日(土)ウインクあいちにおいて、第38回総合リハビリテーション研究大会を開催しました。この大会は、当事者・市民と、医療・教育・職業・福祉・介護・工学・行政等の専門職が共に学び、交流することを目的とし、(公財)日本障害者リハビリテーション協会が主催して毎年開催されています。愛知県での開催は、第17回(実行委員長:村地俊二先生)以来、21年ぶりでした。

今回は、医療・介護・福祉の連携に関するパネルディスカッション(野口宏名誉教授など4演者)、就労支援

リハビリテーション科・教授(特任)木村 伸也
を考えるシンポジウム(5演題)、三浦公嗣厚労省老健局長、野田聖子代議士、炭谷茂日本障害者リハビリテーション協会会長、八藤後猛教授(日本大学理工学部)による講演、支援団体・大学・企業による展示等、多彩な企画に550名が参加しました。総合リハビリテーションの発展と普及のために、今後も愛知県・中部地区で交流を活性化していきたいと考えています。

本学教職員の皆さまからのご支援と、(一財)愛知医科大学愛恵会、(公財)大幸財団の助成に心から感謝を申し上げます。

第15回日本内分泌学会東海支部学術集会

平成27年9月26日（土）ウインクあいちにおいて、第15回日本内分泌学会東海支部学術集会を開催しました。本学術集会は、日本内分泌学会の東海支部が開催する学術集会で、毎年1回開催され、特に若手内分泌科医や研修医の発表の場としても活用されています。

東海支部は、愛知・岐阜・三重・静岡の4県で構成されており、一般演題は25題の応募を頂き、158名にご参加頂き盛会裏に会を終了することができました。

今回は、ランチョンセミナーで神奈川県立がんセンター腫瘍内科部長の酒井リカ先生に「分子標的薬時代における進行甲状腺癌の治療～甲状腺癌診療連携プログラム

医療安全管理室・教授 今井 常夫を介したチーム医療：当院の試み」というタイトルでご講演を頂きました。また、女性学会員が企画するセミナー「JES We Can Tokai企画セッション」では、虎の門病院間脳下垂体外科の山田正三先生に「下垂体腺腫の病理診断：その有用性について」というタイトルでご講演頂きました。

末筆となりましたが、本学会の開催に当たり、本学特に乳腺・内分泌外科、内分泌・代謝内科の先生・スタッフの方及び学会関係者の皆さまに多大なるご支援とご協力を賜りましたことを心より御礼申し上げます。

第80回私立医科大学病院中央検査部技師長研修会

平成27年10月23日（金）大学本館303講義室において、第80回私立医科大学病院中央検査部技師長研修会を本院中央臨床検査部の担当で開催しました。

本研修会は、全国29私立医科大学の関連病院が持ち回りで開催し、本院は今回が初めての担当となります。今回は、全国の40施設から40名の検査部技師長の参加がありました。

研修会では、最初に今年度実施予定の技師長会事業について審議された後に、本院医事管理部長の秋田高典氏

中央臨床検査部・技師長 岸 孝彦に「新病院コンセプト“生活時間の最大活用”の具現化」及び株式会社アイブレイン代表取締役の今西陽一郎氏に「病院経営に検査部はいかに貢献できるか？」のタイトルでご講演頂きました。また、講演終了後には本院の施設見学会を行い、NAVITを中心とした新病院の機能を参加者に見て頂くことができました。

本研修会の開催に当たり、多大なるご支援・ご協力を頂きました本学関係者の皆さま方に深謝いたします。

規 則

規則の制定・改廃情報をお知らせします。

就業規則の一部改正等

本学職員に対する出向制度の導入に伴い、次の関係規則が整備されました。

施行日は、いずれも平成27年10月1日

【一部改正】

- ・学校法人愛知医科大学就業規則

【新規制定】

- ・学校法人愛知医科大学職員出向規程

学部長任用規程の一部改正等

学校教育法改正（平成27年4月1日施行）の趣旨に鑑み、本学における学部長の選考方法等の見直しが行われたことに伴い、次の関係規則が整備されました。

施行日は、いずれも平成27年9月28日

【一部改正】

- ・愛知医科大学学部長任用規程

【廃止】

- ・愛知医科大学医学部長候補者選考規程
- ・愛知医科大学看護学部長候補者選考規程

人を対象とする医学系研究等に関する倫理規程の制定等

本学及び本院において、人を対象とする医学系研究等を行う際の倫理審査体制等を整備するため、愛知医科大学における人を対象とする医学系研究等に関する規程が制定され、医学部、看護学部、病院のそれぞれに倫理委員会が置かれ、各組織における倫理審査体制等が整備されました。

施行日は平成27年8月1日

また、この制定に伴い、次の関係規則が整備されました。

施行日はいずれも平成27年8月1日

【新規制定】

- ・愛知医科大学病院倫理審査規程
- ・愛知医科大学病院倫理委員会規程

【一部改正】

- ・愛知医科大学医学部倫理審査規程
- ・愛知医科大学医学部倫理委員会規程
- ・愛知医科大学看護学部倫理規程

【廃止】

- ・人を対象とする医学系研究に関する倫理指針に定める権限等の委任について
- ・倫理委員会の専門委員会に関する細則

医学部教員選考規程の一部改正

愛知医科大学医学部教員選考規程の一部が改正され、教員の採用等に係る提出書類が整理されました。

施行日は平成27年10月1日

教員赴任旅費支給基準の一部改正

愛知医科大学教員赴任旅費支給基準の一部が改正され、教員の赴任に係る赴任旅費の適用範囲、移転料等が整備されました。

施行日は平成27年10月9日

看護実践研究センター認定看護師教育課程設置規程の一部改正

日本看護協会が定める認定看護師教育基準カリキュラムの改正に伴い、愛知医科大学看護学部附属看護実践研究センター認定看護師教育課程設置規程の一部が改正され、授業科目等が整備されました。

施行日は平成27年9月1日

医療情報システム関連規則の整備

電子カルテ導入等に伴い、本院において取り扱う医療情報及び医療情報システムの安全かつ合理的な運用を図っていくため、次の関係規則が整備されました。

施行日はいずれも平成27年8月1日

【新規制定】

- ・愛知医科大学病院医療情報セキュリティ基本規程
- ・愛知医科大学病院医療情報システム運用管理要綱
- ・愛知医科大学病院医療情報システム障害対応要綱
- ・愛知医科大学病院医療情報システム苦情・相談要綱

【廃止】

- ・愛知医科大学病院医療情報システム運用管理規程
- ・愛知医科大学病院医療情報システム利用規程

診療録管理規程の一部改正

愛知医科大学病院診療録管理規程の一部が改正され、電子カルテ導入に伴い、診療録の管理・保管方法等が整備されました。

施行日は平成27年8月1日

受託臨床研究規程等の制定

本院における医薬品又は医療機器を用いた受託臨床研究の実施に関し必要な事項を定めるため、次の関係規則が整備されました。

施行日は、いずれも平成27年8月1日

【新規制定】

- ・愛知医科大学病院受託臨床研究規程
- ・受託臨床研究の研究経費の取扱いについて

周術期管理チーム規程の制定

本院における周術期医療をより安全なものとし、質の高い医療を提供するため、愛知医科大学病院周術期管理チーム規程が制定され、周術期管理チームの組織、任務等が定められました。

施行日は平成27年8月1日

医療ガス安全管理委員会規程の一部改正

愛知医科大学病院医療ガス安全管理委員会規程の一部が改正され、医療ガス安全管理委員会の委員構成等が整理されました。

施行日は平成27年10月1日

歯科感染予防対策委員会規程の廃止

本院における感染予防対策について、愛知医科大学病院感染予防対策委員会に機能を集約し、効率化を図ることとなったことに伴い、愛知医科大学病院歯科感染対策予防委員会規程が廃止されました。

施行日は平成27年9月30日

実地に役立つ教育，社会に役立つ研究を目指して

公衆衛生学講座 教授 菊地 正悟

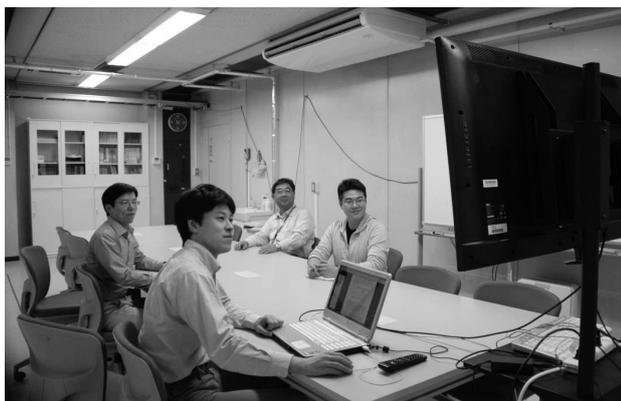
【医学教育のグローバルスタンダードを目指して】

公衆衛生学は集団を対象とするところが、他の分野と異なる点である。本講座では、医学部3学年次生を対象に平成16年頃から、卒前教育として疾病の集団発生への対応方法を学ぶ、紙上シミュレーション演習を行っている。

同じ疾病が多く発生している場合に、どのように情報を収集、分析して、規模の把握、原因の特定、対策の策定に結びつけるかをグループ単位で学ぶものである。状況と情報の収集方法が選択肢で与えられ、選んだ選択肢に応じた情報が与えられるので、分析して次の段階へ進むというものである。

分析には疫学的手法やパソコンによる計算が必要であり、背景の知識として、感染症や中毒など、それまでに学んできたことが必要となる。最後に各グループで、原因と対策、そこに至った過程を発表し合うことで理解を深めるようにしている。情報の分析を進めていかないと何が起きているか分からないので、秘密を解くような興味を持ってもらうことを期待している。

他の大学で実施しているところは稀のようである。医師国家試験で求められる知識も、どう使うのかを経験しないと活きる知識にはならない。今後も講義一辺倒でなく、このような形式の授業を工夫して、実際に遭遇した場面で活きる知識を得てもらえるような教育をしたいと考えている。



【世界に発信する医学研究】

本講座では、胃がん、膵・胆道がんなどの疾患の疫学研究を行っている。胃がんについては、ピロリ菌が最強の原因であること、ピロリ菌感染者が減少していることを明らかにしてきた。これからは、ピロリ菌に未感染で胃がんになる可能性の低い人が多くなりつつあるがん年齢の人の中から、胃がんの高危険者をどのようにスクリーニングして胃がん死を防ぐかが一つの課題である。もう一つ、ピロリ菌はわが国では母子や父子の感染が主なので、次世代への感染防止のために、子ができる前の検査と感染者の除菌を広めていきたいと考えている。その一つとして、中高生での学校を通じての検査の実施を行いたいと考えている。

膵・胆道がんについては、本院を含む多くの病院、患者さんの協力を得て、既に膵がん800人、胆道がん400人、ほぼ同数の対照から血液や生活習慣の情報の提供を受け、保存している。一部分析済みであるが、更に最新の方法で分析を行い、予後の悪いこれらのがんの発生予防、早期診断の方法を明らかにしていく計画である。

【講座からの一言】

実地に役立つ教育，社会に役立つ研究を目指して奮闘しています。今後とも、ご支援よろしく申し上げます。

